# メディチ銀行本部の秘密帳簿と会計実務

橋 本 寿 哉

# 要旨

1397年に創設されたメディチ銀行は、現代の持株会社組織に似た構造をもつ大規模商業組織として発展を遂げ、15世紀のメディチ家の政治的、文化的活動を支えたが、創設から半世紀以上に亘って、フィレンツェの本部組織で記録されていた3冊の秘密帳簿が 20 世紀中葉に発見された。3冊の帳簿には、本部組織や各地の拠点の結成契約書が書き写された他、本部組織において記帳された会計記録が含まれていた。持株会社形態の組織体制が完成された 1435 年以降の帳簿には、各地の拠点を設立するための資本の拠出や各拠点で稼得した利益額の計上及び分配等が、複式簿記を用いて整然と記帳されており、巨大組織の効率的な管理を実現するため、各地の拠点を含む組織全体の会計実務を総括する体系的な実務が行われていたことがわかる。しかし、定期的な帳簿の締め切りや決算書等の作成は行われておらず、最終的には、メディチ家当主らの持分管理に重点を置いたものへと変化していった。

# キーワード

メディチ銀行, 持株会社, 秘密帳簿, 複式簿記, 拠点管理, 出資者持分管理

# **ABSTRACT**

The Medici Bank, founded in 1397, is known for its advanced organizational structure resembling that of a modern holding company. The secret account-books of the head office of the bank were found at the middle of the 20th century, and in the books were recorded investments for establishing branches, yearly profits of all branches, its distributions among the investing partners including the Medici, etc. All entries were recorded under the perfect double-entry bookkeeping system, though the books were not closed regularly, nor were any financial statements prepared. It is thought that the primary objective of the accounting of the head office was to integrate the practices of all branches, and to control the financial results and conditions of each branch, but it seems to have shifted for controlling the owner's equity of the Medici after the effective accounting system was established and worked.



Medici Bank, Holding company, Secret account-book (Libro segreto), Double-entry bookkeeping, Branch management. Accounting for owner's equity

# 1. はじめに

メディチ家は、15世紀フィレンツェの実質的な支配者として君臨し、ルネサンス文化を花開かせた最大の立役者として知られるが、その広範な政治的、文化的活動を支えたメディチ銀行の経営を中心とする経済的側面については、長い間、正確な認識と正当な評価がなされてこなかったように思われる。それは、メディチ銀行の活動や経営の実態を伝えるものは、ほとんど記録として残されていないか、現存していても断片的なものしかないと考えられてきたため、ほとんど注目が集まることがなかったことによるものと考えられる。

しかしながら、こうした状況も、20世紀中葉に、フィレンツェのメディチ銀行本部において記録されていた3冊の秘密帳簿が、間違ったナンバリングによって、膨大なメディチ家関係文書の中に埋もれていたのが発見されたことによって、転換を遂げることとなった。発見された秘密帳簿には、本部組織や各拠点の設立に関連する契約文書の写しの他、各拠点の年度ごとの利益やその分配、及び本部組織における出資者の持分等を記録した会計記録が含まれていた。こうした記録の発見によって、メディチ銀行の経営の全体像を明らかすることが可能になったのである。

これらの帳簿の発見にも関係したレイモンド・ドゥ・ルーヴァー(Raymond de Roover, 1904-1972)は、当該秘密帳簿に加え、他の会計帳簿類、契約文書、通信記録等の現存するメディチ関連の膨大な史料の詳細な分析から、メディチ銀行の経営実態を明らかにした(1)。彼の研究からは、ヨーロッパ各地に多くの拠点を配した大規模商業組織として発展を遂げたメディチ銀行では、その組織構造も含め、想像以上に合理的な経営管理が実践されていたことがわかる。それは、現代の感覚からしても、極めて進歩的なものであり、現代のグローバル企業の原型をそこに見出すことも可能である。

メディチ銀行においてかくも合理的な経営管理が実現され得た一つの要因として、組織全体で、体系的な会計実務が行なわれていたことが挙げられよう。14世紀末までに、フィレンツェを中心とするトスカーナ地方の「コンパニーア(compagnia)」と呼ばれる商業組織の実践の中で、完結した一つの記帳体系としての複式簿記が完成されたと考えられているがゆ、メディチ銀行では、ある時点以降、組織全体において、この完成されて間もない複式簿記が採用されていたと見られる。当然フィレンツェの本部組織においても採用されていたと考えられ、メディチ銀行のような大規模組織の本部において、複式簿記を用いてどのような会計実務が行なわれていたかを知ることは、組織全体の経営管理の実態についての更なる理解を深めるとともに、簿記・会計発達史の観点からも重要な意味をもつものと考えられる。

本稿では、上記の考えに基づき、メディチ銀行本部の秘密帳簿に記録された内容を、フィレンツェ国立古文書館(Archivio di Stato di Firenze)に保管されている一次資料を用いて分析し、ドゥ・ルーヴァーの研究においても立ち入った検討が行われていないメディチ銀行本部で行なわれていた会計実務の詳細を明らかにする。

# 2.メディチ銀行の組織構造と経営管理

### (1) メディチ銀行発展の歴史

メディチ銀行の創設は、ジョヴァンニ・ディ・ビッチ・デ・メディチ (Giovanni di Bicci de' Medici, 1360-1429) が、遠縁のヴィエーリ・ディ・カンビオ (Messer Vieri di Cambio) が営んでいたローマでの銀行業務を引き継ぎ、その本拠地を故郷のフィレンツェに移した 1397 年とされる。当初、フィレンツェとローマの 2 拠点体制でスタートしたが、その後、各地に拠点を設ける他、織物工業へも早くから進出し、事業規模は拡大を続けた。

1420 年に、コジモ (Cosimo de' Medici, 1389-1464) とロレンツォ (Lorenzo de' Medici, 1395-1440) の二人の息子が、銀行を含むメディチ家のすべてを継承したが、特にメディチ家の当主となった長兄のコジモは、その卓越した能力を、政治、経営の両面で発揮した。コジモは、フィレンツェにおける有力家系間の激しい政治的対立を勝ち抜き、1434 年にメディチ家による支配体制を固めることに成功すると、その翌年に、メディチ銀行の抜本的な組織再編を行った。各地の拠点を含む組織全体をより効率的、効果的に管理、統括するため、メディチ銀行の各組織を結成し直して、次節で見るような極めて進歩的な経営組織を構築し、その後の発展のための礎を築いたのである。

メディチ銀行は、コジモ以後、三代のメディチ家当主によって継承され、メディチ家がフィレンツェを追放された後の1494年に破綻するまでの約100年に亘って存続した。本稿で考察の対象とする3冊の秘密帳簿は、その前半部分をカバーするものである。

#### (2) 持株会社形態の組織構造

メディチ銀行では、メディチ家の当主らは、「マッジョーレ (maggiore)」と呼ばれて最高位に置かれ、この下に重層的に役職と組織が設けられた。

1435年の組織再編において、コジモは、まず、マッジョーレに次ぐナンバー2ポストの「総支配人(ministro)」として選任したアントニオ・サルターティ(Antonio di Messer Francesco Salutati, 1391-1443)、ジョヴァンニ・ベンチ(Giovanni d'Amerigo Benci, 1394-1455)の二人とメディチ家との共同出資によって、フィレンツェの本部組織を結成させ、これに続いて、今度は各地の拠点を、この本部組織と各拠点の「経営責任者(governatore)」として任命した者との共同出資によって、それぞれ別個のコンパニーアとして結成させた。こうした方法で組織を結成

させるに当たり、本部組織においてはメディチ家の出資比率を、各拠点においては本部組織の出 資比率を常に高く保ち、メディチ家による組織全体の支配体制は確固たるものとされた。一方で、 共同経営者である総支配人及び各地の拠点責任者には、出資比率以上の割合で利益を分配するこ とを約束し、利益獲得のモチベーションを高めた。既にあったローマやヴェネツィア等の拠点や 毛織物、絹織物工業会社をこの方法で結成し直した他、ピサやアヴィニョンにも同様の方法で矢 継ぎ早に拠点を設けていった。

こうして形成されたメディチ銀行の組織全体は、ドゥ・ルーヴァーが言うように、現代の持株会社形態の組織に極めて近いものであった<sup>(3)</sup>。

# (3) 経営管理体制と複式簿記による会計実務

各地の拠点における業務執行は、すべて拠点責任者に委任され、具体的な事業運営方法については、拠点結成時に締結される契約書において詳しく規定された<sup>(4)</sup>。また、一年ごとに会計帳簿を締め切って決算を行い、作成した会計諸表の提出によって、事業の成果をフィレンツェの本部に報告することがすべての拠点に対して義務付けられていた。

メディチ銀行では、遅くとも 1435 年の持株会社形態の組織への改編以降は、すべての拠点において複式簿記が採用されていたと見られる。わずかに現存するメディチ銀行の拠点で作成された決算書等からは、各拠点では、資産、負債、資本、収益、費用からなる完全な勘定体系が設けられ、すべての取引が複式記帳されるとともに、毎年フィレンツェ暦の最終日である 3 月 24 日付で帳簿の締切りが行われゆ、各勘定残高から貸借対照表と損益計算書に相当するものが作成されていたことがわかるゆ。

年度ごとの決算で作成された会計諸表は、勘定明細や他の報告書類とともにフィレンツェの本部に送られ、総支配人よって厳しいチェックを受けた<sup>(7)</sup>。また同時に、各拠点の年度ごとの利益は本部組織の秘密帳簿に転記され、分配計算が行われた。本部組織において行われた会計実務は、各拠点で行われた複式簿記による会計実務を総括するものであったと見ることができる。

# 3.メディチ銀行本部の秘密帳簿

#### (1) 3冊の秘密帳簿の概要

発見された3冊の秘密帳簿は、1397年のジョヴァンニによる銀行創設から、コジモによる組織再編とその後の飛躍的な発展を経て、1451年にコジモが息子のピエロらに事業を継承するに至るまでの半世紀以上に亘る期間について、銀行の活動を間断なく記録している。本稿では、この3冊を、記帳された時系列に従って、それぞれ「第1秘密帳簿」、「第2秘密帳簿」、「第3秘密帳簿」と呼ぶこととする。

それぞれの帳簿の正式名称、記帳期間及びフォーリオ数は以下の通りである。

#### □第1秘密帳簿

帳簿名称 ジョヴァンニ・ディ・ビッチ・デ・メディチとパートナー達のフィレン

ツェの銀行の秘密帳簿 (Libro segreto di Giovanni di Bicci de'Medici e

conpagni, Banco di Firenze)

記帳期間 1397~1427 年

フォーリオ数 129 (但し、最初の10フォーリオは現存せず)

### ■第2秘密帳簿

帳簿名称 コジモ&ロレンツォ・デ・メディチ、イラリオーネ・デ・バルディの秘

密帳簿白帳A® (Libro segreto bianco segnato A di Cosimo e Lorenzo

de'Medici, e di Ilarione di Lipaccio de'Bardi)

記帳期間 1420~1435 年

フォーリオ数 85

### □第3秘密帳簿

帳簿名称 コジモ&ロレンツォ・デ・メディチ、ジョヴァンニ・ベンチ、アントニ

オ・サルターティの秘密帳簿黄帳 (Libro segreto giallo di Cosimo e Lorenzo de' Medici, di Giovanni d'Amerigo Benci, e di Antonio di

messer Francesco Salutati)

記帳期間 1435~1451 年

フォーリオ数 100

メディチ銀行では、現存するほとんどの会計帳簿や文書類が木綿紙を用いて作られているのに対し、これら3冊の秘密帳簿には羊皮紙が用いられている。このことからも、これらの帳簿の重要性を窺い知ることができる<sup>(9)</sup>。

# (2) 秘密帳簿に記録された内容

「秘密帳簿 (libro segreto)」は、13世紀後半に誕生したコンパニーアが、14世紀に入ってから本格的な発展を遂げ、事業や組織の規模が拡大する中で、コンパニーアの重要事項を記録するために用いられるようになった帳簿である。秘密帳簿には、通常、コンパニーアの出資割合、運営方法、利益分配比率等の重要事項を規定した結成契約文書が書き写され、また、出資者の持分勘定や重要な取引先等の人名勘定が設けられて記帳される他、諸帳簿の各勘定残高を集計して「ビランチオ (bilancio)」(10)等の決算書が作成された。このように、秘密帳簿はコンパニーアにとっての機密情報が詰まったものであったことから、使用人らの眼に触れないように、コンパニーア

の出資パートナーによって、鍵のついた金庫等で厳重に管理されたという(11)。メディチ銀行本部における3冊の秘密帳簿も、他のコンパニーアにおいてと同様、組織の重要機密事項が記録され、厳重に管理されたものと考えられる。

第1秘密帳簿は、メディチ銀行の創設時からの活動を記録したものである。ジョヴァンニ・ディ・ビッチは、引き継いだローマの銀行業務の本拠地をフィレンツェに移し、ここでベネデット・デ・バルディ(Benedetto di Lipaccio de' Bardi)を共同経営者として新たにコンパニーアを結成した後、本格的に業務を開始した(12)。帳簿の冒頭の9フォーリオには、その結成契約書の写しの他、その後設立された各地の拠点の結成契約書の写しが記されたと考えられているが、この部分は現存していない。その後は、出資者である二人の持分勘定を始めとする様々な勘定の記帳記録が続いている。

第2秘密帳簿は、1420年にジョヴァンニが商業活動の第一線から退き、コジモとロレンツォの 二人の息子が事業を継承してからの活動を記録したものである。この時、二人を補佐する総支配 人として、イラリオーネ・デ・バルディ(Ilarione di Lipaccio de' Bardi)が共同経営者に選ばれ、 新たに組織が結成された<sup>(13)</sup>。帳簿の冒頭(表紙)には、この帳簿がそうした体制の下で記録され る旨のごく簡単な記述が見られ、続いてこの本部組織の結成契約書が書き写されている。他に、 ローマ、ヴェネツィア、ナポリの拠点結成契約書も書き写され、この後に会計記録が続く。

第3秘密帳簿は、コジモが 1435 年にメディチ銀行の組織再編を行った後、銀行の本格的な発展が見られた時期の活動を対象としており、その後コジモが商業活動の第一線から退くまでが記録されている。この第3秘密帳簿のすべては、総支配人の一人として選任されたジョヴァンニ・ベンチによって記録されたと考えられている(14)。帳簿は前半と後半の二つのパートに分かれているが、この点については後述する。帳簿の冒頭には、この帳簿(正確には、帳簿の前半部分を指す)についての説明が、第2秘密帳簿の冒頭に記されたものと比べて、より詳しく記述されており、この部分を読むだけで、この帳簿が記録されるに当たって新たに構築された当時の経営体制やこの帳簿が記録される具体的な目的等を理解することができる。そして、帳簿本体には、本部組織のみならず各拠点の結成契約書が書き写された後に会計記録が続くのは、第1、第2秘密帳簿と同じである(後半部分についても同じ。)。

以上のように、メディチ銀行本部の秘密帳簿に記録された内容は、3冊ともに、コンパニーア 結成契約書と会計記録から構成されていた。これらの秘密帳簿が記されたフィレンツェの本部組 織以外に、各地の拠点の設立に関する結成契約書も書き写されていることや、ビランチオ等の決 算書に相当するものが見当たらない点に、一般のコンパニーアの秘密帳簿とは異なる独自の特徴 を見出すことができるが、組織の機密事項が記録され、限られた者のみが触れることのできる最 も重要な帳簿であった点において違いはなかった。

# (3) 会計実務の進化

3冊の秘密帳簿に見られる会計記録だけに注目すると、メディチ銀行の組織の発展に対応して、

記帳形式や内容に変化が見られ、会計実務の進化をそこに認めることができる。

第1秘密帳簿においては、様々な勘定に取引が貸借複式で記帳されていると見られるが、勘定の貸借記帳形式は一定していない。第2、第3秘密帳簿のように、貸借を左右に対照させて記録する方法、すなわち「左右対照方式 (sezioni contrapposte)」で記帳されている勘定もある一方、一つのフォーリオ内の上下に貸借を記録する方法、すなわち「上下連続方式 (sezioni sovrapposte)」が採用されている勘定も見られ、記帳のあり方は必ずしも体系的ではない。

秘密帳簿は、コンパニーアの規模の拡大に対応して、組織内で複数の帳簿が用いられるようになった状況において、それらを総括する役割を担っていた。従って、秘密帳簿は、コンパニーアの機密情報が記載されていたという意味において重要なだけでなく、コンパニーアにおける体系的な会計実務を成り立たせるために不可欠なものとしても、極めて重要な役割を担うものであった。メディチ銀行設立当初は、この第1秘密帳簿も、他の帳簿と一緒に用いられて銀行の諸取引が記帳されていたと見られるが、他に用いられた会計帳簿が一切現存しておらず、それらとの連携関係を知ることができないため、全体の貸借計上額合計の一致を確認することができない。メディチ家や総支配人の持分勘定、拠点への出資勘定、俸給を計上する使用人の人名勘定等、雑多な勘定が設けられており、この時点で行われていた実務は、まだ十分に体系化されていたとまでは言うことができない。

これに対して、第2秘密帳簿以降は、形式と内容の両面において改善が図られているのを確認することができる。記帳形式は、一つの勘定について、見開きの左フォーリオに借方記入が、右フォーリオに貸方記入が行われるように統一されており(15)、また、フォーリオごとにそれぞれの合計額も算出され、すべての勘定において貸借計上額合計の一致を確認することができる。設定されている勘定については、持分勘定、拠点への出資(投資)勘定等の限定されたものだけに変化しており、各地の拠点を統括する本部組織としての会計実務が形成され、定着していったと見ることができる。

このように実務は進化し、1435年のコジモによる組織再編によって、持株会社形態の組織体制が完成された後に記録された第3冊秘密帳簿において、その体系化された完全な姿を見ることができる。次章では、この第3秘密帳簿における会計記録に対象を絞って、メディチ銀行の本部組織において実践された会計実務の詳細を見ていきたい。

# 4. メディチ銀行本部の会計実務(1435~1451年)

#### (1)第3秘密帳簿の構成

第3秘密帳簿は、1435年から1451年までの約16年間に亘る期間の活動を記録しているが、 既述の通り、前半と後半の二つのパートに分かれている。前半部分は、1435年6月8日から1441年11月1日までの6年5か月間が、後半部分は、その後1451年3月24日までの9年5か月間 が、それぞれ記録の対象期間となっている。このように第3秘密帳簿が二つのパートに分かれているのは、1440年9月23日に、コジモとともにマッジョーレの一人として君臨してきた弟のロレンツォが死去したことによる。

1435年の組織再編で、メディチ銀行は新たなスタートを切ったが、ロレンツォの死去に伴い、本部組織を含むメディチ銀行のすべての組織結成契約が自動的に終結することになったのである。しかし、コジモは当年度末、すなわち翌年1441年の3月24日まで既存の契約に基づいて業務を継続し、その翌日付で新たな体制ですべての組織を結成し直すこととした。以上の理由から、第3秘密帳簿は、既存の諸契約が終結した段階で、本部組織の出資者各人の持分等を確定させるため、一旦締め切られることになった。そのため、各地の拠点に対しても帳簿の締め切りと決算書の作成と提出が要請されたが、拠点からの報告がすべて本部組織に到着し、最終的に持分等の確定ができたのが同年11月1日であった。その後、コジモがメディチ家のすべての持分を継承し、一人でマッジョーレとして銀行を支配する体制がスタートしたことをもって、後半部分の記録が開始されている。この後半部分は、1451年にコジモ自らが引退を決め、これに伴って息子ピエロらに持分を継承することで記録が終わっている。

前半部分と後半部分は、下記の通り、冒頭部分のそれぞれの記帳の背景となる経営体制や組織、 記録の目的等の説明の記述に続いて、本部組織及び各地の拠点や織物工業会社の結成契約書の写 しが見られ、その後、会計記録が続いている。

### □前半部分

c. 1r.	表紙(経営体制、記録目的等の説明)
cc. 2r./v.	本部組織のコンパニーア結成契約書(1435年)の写し
cc. 3r./v.	ヴェネツィア・メディチ銀行 コンパニーア結成契約書(1435年)の写し
cc. 4r./v.	ローマ・メディチ銀行 コンパニーア結成契約書(1435年)の写し
cc. 5r./v.	アンコーナ アコマンダ結成契約書(1436年)の写し
cc. 6r./v.	絹織物工業会社 コンパニーア結成契約書(1437年)の写し
ec. 7r./v.	ローマ・メディチ銀行 コンパニーア結成契約書(1439年)の写し
cc. 8r./v.	ジュネーヴ・メディチ銀行 コンパニーア結成契約書(1439年)の写し
cc. 9r./v.	毛織物工業会社(Ⅱ) コンパニーア結成契約書(1439年)の写し
cc. 11v49r.	会計記録

#### □後半部分

cc. 50r./v.	表紙(経営体制、記録目的等の説明)
c. 51r.	絹織物工業会社 コンパニーア結成契約書(1441年)の写し
c. 51v.	毛織物工業会社(Ⅱ) コンパニーア結成契約書(1441年)の写し
c. 52r.	ピサ アコマンダ結成契約書(1442年)の写し
cc. 52v53r.	絹織物工業会社 コンパニーア結成契約書(1444年)の写し
cc. 53v54r.	ロンドン・メディチ銀行 コンパニーア結成契約書(1446年)の写し
cc. 54v55r.	毛織物工業会社(I) コンパニーア結成契約書(1443年)の写し
cc. 55r97r.	会計記録

各地の拠点や織物工業会社のコンパニーア結成契約書については、何らかの理由により、限られたものだけが書き写されたようで、締結されたすべてを網羅している訳ではない。また、会計記録は、前半・後半ともに、それぞれの記帳スペースの大半を占めていることがわかる。

前半と後半の会計記録の構成や記帳形式に大きな違いはなく、それぞれが完結したものとなっている。各フォーリオに設定された諸勘定に、本部組織として必要とされる取引が貸借複式記帳されており、前半部分と後半部分のそれぞれですべての貸借合計が一致していることから、本部組織における会計的な記帳は、この秘密帳簿のみで完結しており、他の帳簿は用いられていなかったと考えられる。仕訳帳も設けられていなかったと見られ、記帳対象となる取引は直接該当する勘定の借方、貸方に記帳されたと見られる。すなわち、元帳だけが設けられ、ここに諸取引が貸借複式で記帳されるのみであった。

尚、当時のフィレンツェでは、1252年に発行されたフィオリーノ金貨に基盤を置いた貨幣計算体系が用いられており、この第3秘密帳簿もこれに基づいて記帳されていた。この体系においては、以下の進法によっていた<sup>(16)</sup>。

1フィオリーノ金貨(fiorino、以下「f.」と表記)
= 29 ソルド・ア・フィオリーノ(soldo a fiorino、以下「s.」と表記)
= 348 デナーロ・ア・フィオリーノ(denaro、以下「d.」と表記)

この場合、フィオリーノ金貨だけが実体貨幣であり、その他は実体をもたず、計算上用いられるだけの観念的な貨幣であった<sup>(17)</sup>。

#### (2) 設定された勘定と記帳形式

第3秘密帳簿の会計記録は、前半部分については c. 12 から c. 49 までの各フォーリオに 71 の 勘定が、後半部分については c. 56 から c. 97 までの各フォーリオに 102 の勘定が設けられて、それぞれ記帳が行われている。これらの設定された勘定は、その性質から、以下の5つのカテゴリーに分類することが可能であると思われる。

- i. 本部組織の出資者であるメディチ家と総支配人の持分を計上する勘定(資本勘定)
- ii. 各地に設立した拠点や織物工業会社への投資額を計上する勘定(資産勘定)
- iii. 各拠点や織物工業会社で稼得した利益を計上する勘定(損益勘定)
- iv. 換算差額を計上する「本帳簿の利益」勘定(損益勘定)
- v. その他の勘定(拠点責任者の人名勘定等)

基本的には、資本勘定、資産勘定、利益勘定から構成されており、設定された勘定に偏りが見られるものの、必要がないものについては設けられていないだけで、各地の拠点においてと同様、 複式簿記の要件を満たす完全な勘定体系が、本部組織においても設けられていたと言える。

### 資料1 第3秘密帳簿における勘定記帳形式例(「ローマ・メディチ銀行の利益」勘定・借方)

+mccccxxxvj	c. 19
1438	
Avanzi della ragione che seghue la corte de dare a dì 12 di dicembre f.	
dumila noveciento trentasette s. xii aff. abiamo posto a conto	
d'Antonio della Chasa per la sua parte degl'avanzi fatti alla	
ditta ragione in questo c. 23 —— —— —— ——	f. $ii^M$ decec xxx vii s. xii
${\bf E}$ dì xi di magio 1439 f. quindicimila noveciento ottann taquattro s. 14	
aff. posto Chosimo e Lorenzo de' Medici deono avere in questo c. 24,	
sono per la 2/3 di £23976 s. ii aff. — — — — — — —	f. $xv^{\mathrm{M}}$ decec lxxx iiij s. xiiij
E dì ditto f. tremila noveciento novantasei s. iii d. vi aff. posto Antonio	
Salutati propria debia avere in questo c. 25 per la sua sesta parte di	
ditti	f. iii $^{\rm M}$ decee lxxxx vi s. iii d. vi
E dì ditto f. tremila noveciento novantasei s. iii d. vi aff. posto Giovanni	
Benci debia avere in questo c. 26 per la sua sesta parte di ditti	
avanzi	f. $\mathrm{iii^M}\mathrm{decec}\mathrm{lxxxx}\mathrm{vi}$ s. iii d. vi
+ f. 29917 s. 4 aff.	

# +1436年 カルタ 19 1438年12月12日、「ローマ宮廷の利益」勘定は、2,937フィオリー ノ 12 ソルディを与えるべし (借方計上)。 本帳簿 c. 23 の「アントニオ・ デラ・カーサ | 勘定は、当会計単位の利益の彼の取り分として持つべし f.2,937 s.12 (貸方) として計上。 — — …… (涂中 6 項目省略) …… 1439年5月11日、同勘定は、15.984フィオリーノ14ソルディを与 えるべし (借方計上)。本帳簿 c. 24 の「コジモ&ロレンツォ・デ・メデ ィチ」勘定は持つべし(貸方)として計上。この金額は、23.976 リラ2 ソルディの利益の3分の2相当額である。—— —— f.15,984 s.14 同日、同勘定は、3.996 フィオリーノ 3 ソルディ 6 デナーリを与える べし (借方計上)。本帳簿 c. 25 の「アントニオ・サルターティ」勘定は、 f.3,996 s.3 d.6 上記(利益)の6分の1を彼の分として持つべし(貸方)として計上。 同日、同勘定は、3.996 フィオリーノ 3 ソルディ 6 デナーリを与える べし (借方計上)。本帳簿 c. 26 の「ジョヴァンニ・ベンチ」勘定は、上 記利益の6分の1を彼の分として持つべし(貸方)として計上。 \_\_\_\_ f.3,996 s.3 d.6 合計 f.29.917 s.4

[出所] ASF, MAP, Filza n. 153, doc. 3, c. 18v.

帳簿には、上記のカテゴリーに関係なく、発生順に勘定を設定して記帳が行われたものと見られ、従ってその配列は体系化されていない。記帳項目数が少ない場合は、同一フォーリオ内に複数の勘定が設けられて記帳されていることもあり、また、記帳スペースが一杯になった場合は、他のフォーリオに改めて同じ勘定が設けられて、残高が振り替えられている。

すべての勘定は、見開きの左右に対照させる形式で貸借の記帳が文章形式で行われており、勘定名を主語とし、借方については、de'dare や deono dare (「与えるべし」の意)、貸方については de'avere や deono avere (「持つべし」の意)といった定型の述語 (動詞)によって貸借が示されている。また、文章中には、相互参照できるように相手勘定が記帳されたフォーリオが明示されている。金額については、文章中に記載されているが、右側に設けられた金額欄に、ローマ数字を用いて改めて記載されている (一部、アラビア数字も使用)。そして、フォーリオ最下部中央に、合計額が算出され、すべての勘定の貸借合計が一致していることが確認できる。

資料1に、「ローマ・メディチ銀行の利益」(18)勘定の借方を例に、記帳形式を示した。ここに見る記帳形式は、他のコンパニーアの会計帳簿においても見られる当時においては一般的なものであり、特筆すべき固有の特徴は見当たらない。

#### (3) 第3秘密帳簿の記帳内容

第3秘密帳簿に見られる本部組織の会計実務は、一般のコンパニーアで行われていたものとは 異なり、限定された勘定を用いて行われたものであった。記帳の対象となったいくつかの事項に ポイントを絞って見ることで、その特徴を明らかにすることができると思われる。

#### ①出資金勘定と拠点別投資勘定

第3秘密帳簿前半部分の最初の記帳は、1435年7月6日付で行われている。それは、本部組織結成のために、メディチ家(コジモとロレンツォ)、ジョヴァンニ・ベンチ、アントニオ・サルターティの三者が共同で出資し、その拠出額を拠点設立のための資本として投資したことを記帳したものである。第2秘密帳簿からの残高繰越等はなく、この記帳が当第3秘密帳簿にとっての開始仕訳である。記帳された内容を仕訳の形式で示すと、以下の通りである。

記帳例1:本部組織結成のための出資と拠点設立のための投資 1435年7月6日付

(借方)		(貸方)	
ジュネーヴ・メディチ銀行	f.8,000	メディチ家コジモ&ロレンツォ	f.24,000
(I nostri di Ginevra) c. 14		(Cosimo e Lorenzo de' Medici)	e. 12
ヴェネツィア・メディチ銀行	f.7,560	ジョヴァンニ・ベンチ	f.4,000
(I nostri di Vinegia) c. 14		(Giovanni d'Amerigo Benci) c.	13
ヴェネツィア・メディチ銀行	f.16,440	アントニオ・サルターティ	f.4,000
(I nostri di Vinegia) c. 15		(Antonio di Francesco Salutati)	c. 13

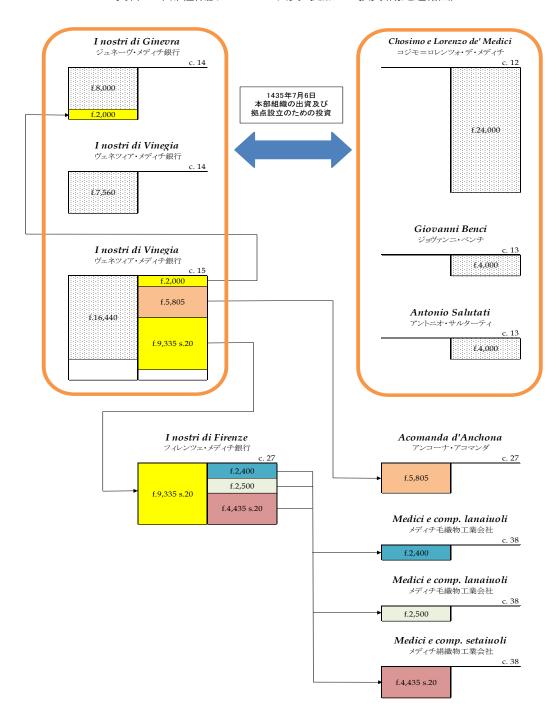
三者それぞれの出資金勘定(資本勘定)が設けられ、ここに本部組織の結成契約で規定された出資割合に従って拠出された金額が計上されるとともに、相手勘定には拠点名をつけて設けられた拠点別投資勘定(正確には、「我らのヴェネツィア(I nostri di Vinegia)」、「我らのジュネーヴ(I nostri di Ginevra)」等の勘定名)を用いて投資額が記帳されている(19)。しかし、三者から現金で資本が拠出され、これを拠点設立のための資金として投資したとすれば、現金勘定を用いて2段階に分けて記帳が行われるべきであるが、そのような処理にはなっていない。それは、これら2つの拠点はこの時点で新しく設立したものでなく、以前より存在していたものを再結成したものであったことに理由があると思われる(20)。すなわち、これらの拠点では既にある程度の資本が蓄積されていたと見られ、拠点の既存の資本額のうち、本部組織に帰属する部分を、三者でその保有比率を改めて設定し直し、これを新たに設立した本部組織の出資額として計上したものと考えられる。そういった意味では、前帳簿と間接的ながら関係をもった記帳であったと言えるが、帳簿内にこの点についての説明はなく、詳細は不明である。しかし、上記の記帳そのものは会計的に見て正しいものである。

上記の通り計上された拠点への投資勘定のうち、ヴェネツィア・メディチ銀行については、同名だが c. 14 と c.15 の異なるフォーリオに別々に設けられた二つの勘定に、f.7,560 と f.16,640 の異なる金額が計上されている。このうち、前者の金額のみが、ヴェネツィア・メディチ銀行の資本金 (corpo) となるが、後者については、他の拠点や織物会社の設立のための資本として他の勘定に振り替えられて投資されていることが、その後の記帳記録からわかる。c. 15 に計上された f.16,640 のうち、1436 年 3 月 25 日付で、f.2,000 がジュネーヴ・メディチ銀行の増資のために c. 14 の既出の当該勘定に振り替えられた他、1436 年 5 月 12 日には、c. 27 のアンコーナ・アコマンダ勘定に f.5,805 が振り替えられて、その設立のための資本とされた。また、1436 年 9 月から 1437 年 1 月の間に 4 回に分けて計 f.9,335 s.20 が、c. 27 のフィレンツェ・メディチ銀行勘定に振り替えられた後、この金額は、1440 年 9 月 8 日付で、c. 38 に設けられた毛織物工業会社 2 社と絹織物工業会社 1 社のそれぞれの勘定に振り替えられ、設立のための資本とされていることがわかる。実際の資金の流れも、この記帳内容と同じであったと考えられる。すなわち、ヴェネツィア・メディチ銀行からフィレンツェ・メディチ銀行あてに送金が行われ、この資金が、フィレンツェ市内に織物工業会社 3 社を設立するための資本として拠出されたと考えられる。これらはすべて本部組織による出資であり、このことが最終的に秘密帳簿に正しく記帳される結果となっている。

以上の一連の記帳については、資料2の勘定連絡図で示した通りである。

このように、いずれの拠点に対しても、本部組織ではそれぞれ別個の勘定を設け、ここに投下 資本を計上するという同一の会計処理が行われていた。唯一の例外はローマ・メディチ銀行で、 この拠点は、法王庁からの莫大な資金の管理を委任されて資本金ゼロで設立されたため、上記の ような投資の記帳はない。

資料2 本部組織設立のための出資と拠点への投資(勘定連絡図)



尚、各拠点(織物工業会社を含む)ともに、本部組織による出資に加えて、拠点責任者も一定 割合の出資を行って設立されていたが、その部分については、この秘密帳簿には記録されていない。本部組織として拠点設立のために拠出した投資純額のみが計上されており、拠点の総出資額については、拠点の会計帳簿に記録されて管理されたものと考えられる。

### ②拠点利益の計上と分配

第3秘密帳簿において中心となる記帳内容は、各拠点で稼得した利益の計上とその分配に関するものである。具体的な事業活動を行わず、拠点を統括する立場にあるメディチ銀行の本部組織は、現代の純粋持株会社に相当するが、こうした組織においては、上記のような記帳こそが、帳簿を記録する第一の目的であったと考えられる。

各拠点の結成契約書に規定されているように、拠点責任者は毎年帳簿を締め切って決算を行い、 業績結果を本部組織に報告することとされていた。本部に提出された決算書は、総支配人によっ て厳しいチェックを受けると同時に、報告された各年度の利益額は秘密帳簿に転記され、その後 分配に関する記帳が行われた。

ヴェネツィアの拠点を例に、その利益計上と分配に関する記帳を見てみたい。前節で見た本部 組織からの拠出資本を計上する勘定とは別に、c. 16 に拠点勘定(勘定名は同じ)が設けられ、ま た、c. 17 には「ヴェネツィア・メディチ銀行の利益(Avanzi della ragione di Vinegia)」という 名の収益勘定が設けられている。この二つの勘定を用いて、前者を借方に、後者を貸方に計上す ることで、各年度の利益が記帳された。それは、現代の「持分法(equity method)」によって、 関連会社に対する投資損益を計上するのとまったく同じ手続きである。下記は、1435年度と 1436 年度の利益がそれぞれ計上された際の記帳内容を仕訳の形式で示したものである。

#### 記帳例2:ヴェネツィア・メディチ銀行の 1435 年度の利益計上 1436 年 5 月 16 日付

(借方)		(貸方)	
ヴェネツィア・メディチ銀行	f.4,304	ヴェネツィア・メディチ銀行の利益	f.4,304
(I nostri di Vinegia) c. 16		(Avanzi della ragione di Vinegia)	c. 17

### 記帳例3:ヴェネツィア・メディチ銀行の 1436 年度の利益計上 1437 年 6 月 16 日付

(借方)		(貸方)	
ヴェネツィア・メディチ銀行	f.6,497	ヴェネツィア・メディチ銀行の利益	f.6,497
(I nostri di Vinegia) c. 16		(Avanzi della ragione di Vinegia)	c. 17

上記の記帳に続いて、その後 1439 年度までの 5 期分の利益が、同様の方法で計上されている。 計上の日付が、いずれの年も 5 月中旬から 7 月下旬までの間であることから、毎年 3 月 24 日の 決算日後、各拠点で作成された決算報告書類が本部に届いた時点で記帳されたものと考えられる。 このヴェネツィア・メディチ銀行の利益は、1440 年 5 月 25 日付で 1439 年度の利益が計上され、同時に計上額の一部修正が行われた後、同年 6 月 10 日付で初めて出資者への分配についての記帳が行われている。1435 年 7 月 15 日付で締結され、この第 3 秘密帳簿にも書き写されているヴェネツィア・メディチ銀行の結成契約書には、このコンパニーアの結成期間は、1435 年 3 月 25 日から 1440 年 3 月 24 日までの 5 年間と規定されており (21)、この結成期間が満了するまでの間に、5 期分の利益が毎年計上されたものの、分配は行われずに据え置かれていたことになる。

分配の記帳は、これまで5期分の利益を計上した「ヴェネツィア・メディチ銀行の利益」勘定を借方に、利益が分配される各人の名が付された勘定を貸方に計上することによって行われている。具体的には、以下の仕訳の内容で記帳された。

記帳例4:ヴェネツィア・メディチ銀行の利益分配(1435~1439 年度分) 1440 年 6 月 10 日付

(借方)	(貸方)
ヴェネツィア・メディチ銀行の利益 f.30,833	ロット・ディ・タニーノ f.5,138 s.23 d.8
(Avanzi della ragione di Vinegia) c. 17	(Lotto di Tanino) c. 22
	アントニオ・マルテッリ f.3,854 s.3 d.6
	(Antonio di Niccolò Martelli) c. 22
	メディチ家コジモ&ロレンツォ f.14,560 s.1 d.3
	(Cosimo e Lorenzo de' Medici) c. 12
	ジョヴァンニ・ベンチ f.3,640 d.4
	(Giovanni d'Amerigo Benci) c. 13
	アントニオ・サルターティ f.3,640 d.3
	(Antonio di Francesco Salutati) c. 13

ヴェネツィア・メディチ銀行の結成契約書によれば、この拠点組織は、フィレンツェの本部組織、拠点責任者のロット・ディ・タニーノ、そして拠点責任者補佐のアントニオ・マルテッリの三者による共同出資によって設立され、得られた利益については、ロット・ディ・タニーノがその6分の1を、アントニオ・マルテッリが8分の1を、残りの24分の17はフィレンツェの本部組織が得ることと規定されている(22)。この規定に基づき、5期分の分配対象利益額f.30,833について、まず、ロット・ディ・タニーノとアントニオ・マルテッリがそれぞれ得ると規定された比率の金額が、それぞれの名を付けた人名勘定の貸方に計上されている。そして次に、本部組織への分配額、すなわち利益の24分の17に相当するf.21,840s.1d.10については、本部組織の結成契約書において、メディチ家は3分の2を、ジョヴァンニ・ベンチとアントニオ・サルターティはそれぞれ6分の1を得ることと規定されていたため(23)、これに基づき、それぞれの出資金を計上したものとは別に設けられた人名勘定(持分勘定)の貸方に計上された(24)。分配金額の計算は、デナーリ単位まで正確に行われており、二つの契約で規定された内容が正しく履行されていたこ

とが確認できる。

# 資料3 拠点勘定と拠点利益勘定の記帳内容(ヴェネツィア・メディチ銀行)

# ヴェネツィア・メディチ銀行 (I nostri di Vinegia)

c. 16

											C. 16
計上日	相手勘定・摘要	с.	金 f.	額 s.	d.	計上日	相手勘定・摘要	c.	金 f.	額 s.	d.
1436.5.16	1435年度利益計上	17	4,304	s. 0		1436.9.22	フィレンツェ・メディチ銀行	22	1,866	s. 0	0.
1437.6.16	1436年度利益計上	17	6,497	0	0	"	ロット・ディ・タニーノ	22	433	0	0
1438.7.25	1437年度利益計上	17	7,406	0	0	"	アントニオ・マルテッリ	23	325	0	0
1439.5.16	1438年度利益計上	17	6,370	0	0	1437.8.19	フィレンツェ・メディチ銀行	28	2,280	0	0
1440.5.25	1439年度利益計上	17	8,650	0	0	11	ロット・ディ・タニーノ	22	526	20	0
						11	アントニオ・マルテッリ	23	395	0	0
							:				
							(8項目省略)				
							:				
						1440.5.25	アントニオ・マルテッリ	23	507	0	0
						II	ロット・ディ・タニーノ	22	677	0	0
						11	フィレンツェ・メディチ銀行	34	2,912	0	0
						"	残高繰越	37	14,272	42	0
	借方合計		33,227	0	0		貸方合計		33,227	0	0

# ヴェネツィア・メディチ銀行の利益 (Avanzi della ragione di Vinegia)

c. 17

計上日	相手勘定・摘要	c.	金	額		計上日	相手勘定・摘要	c.	金	額	
81-11-1	THE TENTE SHEET	٠.	f.	s.	d.	HI	III I BUNC IN S	٥.	f.	s.	d.
1440.5.25	利益額修正	16	1,404	0	0	1436.5.16	1435年度利益計上	16	4,304	0	0
	同上	16	990	0	0	1437.6.16	1436年度利益計上	16	6,497	0	0
1440.6.10	ロット・ディ・タニーノへの 利益分配	22	5,138	23	8	1438.7.25	1437年度利益計上	16	7,406	0	0
	アントニオ・マルテッリへの 利益分配	22	3,854	3	7	1439.5.16	1438年度利益計上	16	6,370	0	0
"	メディチ家への利益分配	24	14,560	1	3	1440.5.25	1439年度利益計上	16	8,650	0	0
	ジョヴァンニ・ベンチへの利 益分配	25	3,640	0	3						
	アントニオ・サルターティへ の利益分配	26	3,640	0	3						
	借方合計		33,227	0	0		貸方合計		33,227	0	0

[出所] ASF, MAP, Filza n. 153, doc. 3, cc. 15-17.

このように、各地の拠点の利益は、拠点ごとに設けられた利益勘定の貸方に計上された後、この勘定から、出資者一人一人に設定した人名勘定に、契約で規定された比率に従って、その額を直接振り替えることによって、分配されたことが記帳された。いずれの拠点についても、利益は毎年計上されているが、分配は結成契約書で定めた結成期間が満了して初めて、その間に計上された利益総額を対象に行われた。

資料3に、c. 16 の「ヴェネツィア・メディチ銀行」勘定と c. 17 の「ヴェネツィア・メディチ銀行の利益」勘定の記帳内容を示した。ここに示されている通り、「ヴェネツィア・メディチ銀行の利益」勘定は、利益分配の記帳によって貸借合計が一致して残高はゼロとなっており、これをもってこのフォーリオの記帳は終了している。

その後、ヴェネツィア・メディチ銀行の結成契約書の更新が行われ、1440 年度以降の利益については、別のフォーリオに改めて設けた同名の勘定に記帳が行われ、結成期間満了後に同様に分配の記帳が行われている。

#### ③分配された利益の引き出し

分配された各拠点の利益については、その後、出資者によって実際に金銭の形で引き出されることになる。しかし、既に見たように、利益の分配は各コンパニーアの結成期間が満了するまで行われなかったことから、メディチ家を含む本部組織の出資者三者については、利益の分配に先立って、毎年、仮払いの形で一定額の金銭が引き出されていたと考えられる。その際、本部組織には現金勘定は設定されておらず、また実際に現金を保有していなかったと見られ、同じフィレンツェ中心部で業務を行っていたフィレンツェ・メディチ銀行から受け取っていたと見られる。金銭が引き出されるタイミングは、三者とも同時で、利益分配と同じ比率の金額で行われており、三者の同意の下で、何らかのルールに基づいて行われていたと考えられる。

金銭が引き出された際は、既に見た分配された利益が計上される各人の人名勘定を借方に、フィレンツェ・メディチ銀行勘定を貸方に記帳された。1436年に引き出された際には、以下の仕訳の内容で記帳された。

#### 記帳例5: 出資者による金銭の引き出し 1436年3月24日付

(借方) (貸方)

メディチ家コジモ&ロレンツォ f.5.089 s.19 d.4 フィレンツェ・メディチ銀行 f.7.634 s.14. d.6

(Cosimo e Lorenzo de' Medici) c. 24 (I nostri di Firenze) c. 22

ジョヴァンニ・ベンチ f.1.272 s.12 d.1

(Giovanni d'Amerigo Benci) c. 13

アントニオ・サルターティ f.1,272 s.12 d.1

(Antonio di Francesco Salutati) c. 13

その後、実際に利益の分配が行われると、既に見たように、三者のそれぞれの人名勘定の貸方に分配額が計上され、既に引き出されて借方に計上された額との相殺が行われる。また、同時に、利益分配の対象となった拠点と、実際に分配利益が引き出されたフィレンツェ・メディチ銀行との間で発生している債権債務関係の清算が行われ、これについても、本部組織の秘密帳簿において、フィレンツェ・メディチ銀行勘定を借方に、利益分配の対象拠点勘定を貸方に計上することによって記帳されている。

また、各拠点責任者についても、同様の処理が行われているのを見ることができる。拠点責任者らも、使用人らのように俸給が支払われることがなく、得られた利益の一定割合を得るのみとされていたため、本部組織の三者と同じように、利益分配が行われるのに先立って、毎年、仮払いの形で一定額の金銭を拠点から引き出すことが許されていたと見られる。そうした引き出しが行われると、本部組織の秘密帳簿では、人名勘定を借方に、拠点勘定を貸方に引出額が計上された(既に見た資料3の「ヴェネツィア・メディチ銀行」勘定の貸方に、拠点責任者らを相手勘定として計上されているものがこれに当たる。)。そして、実際に利益の分配記帳が行われると、その相殺が行われた。こうした処理は、各拠点からの報告に基づき、本部組織において記帳されたのである。最終的にこれら拠点責任者らの人名勘定の貸借計上額は一致し、残高はゼロになっている。

以上の記帳の流れを、模式化して図示すると資料4の通りとなる。

このように、利益の分配に先立って、本部組織及び拠点の出資者には、事前の金銭の引き出しが認められ、実際に分配が行われることによって清算が行われるという変則的な処理が行われていたと見られる。しかし、こうした一連の流れは、会計的に正しく記帳されていたである。

本部組織の出資者三者に限定して言えば、分配された利益のすべてが引き出された訳ではなく、一部はそのまま留め置かれ、追加出資額(sopraccorpo)とされた(尚、資料4は、本部組織の出資者三者についても、分配された利益と同額の金銭の引き出しが行われた前提で作成している。)。

#### ④2通貨表示と換算差額

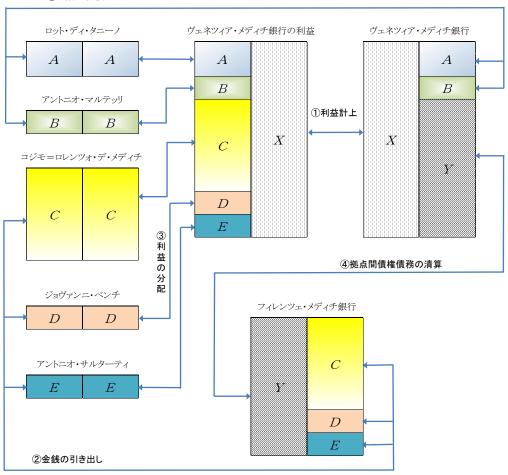
メディチ銀行の各地の拠点では、現地通貨建てで会計帳簿が記帳され、決算書が作成された。 この決算書がフィレンツェの本部組織に送られると、利益額はフィレンツェ貨であるフィオリー ノ建てに換算された上で秘密帳簿に転記された。

c. 16 及び c. 17 において計上されたヴェネツィア・メディチ銀行の 1435 年度から 1439 年度までの各年度の利益は、ヴェネツィア貨のドゥカート建てで報告された利益額を、同一の換算レートでフィオリーノ建てに換算した上で計上が行われているようである。帳簿の当該フォーリオの記帳文章内には、ヴェネツィア通貨建ての金額の記載もあり、最下部にはその合計額も算出されているが、フィレンツェ貨建て、ヴェネツィア貨建てともに貸借計上額が一致している。

しかしその後、各地の拠点の利益が計上されるに当たって、各年度の利益額は拠点からの報告があった時のレートを用いて換算されて記帳されるように変化している。利益分配の記帳や拠点

# 資料4 拠点利益の計上・分配・引き出しの記帳(勘定間の関係)

#### ②金銭の引き出し



(借)ヴェネ	ツィア・メディチ銀行	X	(貸)ヴェネツィア・メディチ銀行の利益	Х
②金銭の引き出し				
(借)ロット・	ディ・タニーノ	A	(貸)ヴェネツィア・メディチ銀行	Α
(借)アントコ	ニオ・マルテッリ	В	(貸) "	Е
(借)コジモ	=ロレンツォ・デ・メディチ	С	(貸)フィレンツェ・メディチ銀行	C
(借)ジョヴァ	アンニ・ベンチ	D	(貸) "	Ε
(借)アントコ	ニオ・サルターティ	E	(貸) "	Е
③利益の分配				
(借)ヴェネ	ツィア・メディチ銀行の利益	A	(貸)ロット・ディ・タニーノ	Α
(借)	"	В	(貸)アントニオ・マルテッリ	В
(借)	"	С	(貸)コジモ=ロレンツォ・デ・メディチ	C
(借)	"	D	(貸)ジョヴァンニ・ベンチ	Ε
(借)	II	E	(貸)アントニオ・サルターティ	E
④拠点間債権債務の	清算			
O # - 11111   F - 1111	/ツェ・メディチ銀行	Y	(貸)ヴェネツィア・メディチ銀行	Y

間の債権債務の清算時の記帳も同様に、本部組織に報告された時の換算レートが用いられていたと見られ、換算レートはその時々で変動することから、拠点勘定(例えば、c. 18の「ヴェネツィア・メディチ銀行(I nostri di Vinegia)」)においては、すべての記帳が終わっても、現地通貨建てでは貸借計上額の合計が一致するものの、フィレンツェ貨建てでは差異が生じる結果となっている。

この差異は、換算差額として、c. 31 に設定された「本帳簿の利益(Avanzi di questo libro)」なる勘定に振り替えられた。そして、他の拠点勘定においても同様に発生した換算差額が計上され、後に見る帳簿の前半部分が締め切られるタイミングで(1441 年 10 月 5 日付)、これを本部組織の出資者三者間で、契約で定めた比率によって分配が行われたことが記帳記録からわかる。

このように2通貨建てで記帳が行われ、貸借の差額を換算損益として処理する実務は、他のコンパニーアにおいても、為替手形の発行と決済等に関連して、14世紀後半から既に行われていた<sup>(25)</sup>。メディチ銀行の本部組織においても、各拠点の毎年の利益額や出資者持分の増減要因の正確な把握を目的として、この発想を取り入れて記帳実務を高度化していったものと考えられる。尚、当帳簿において計上された換算差額はすべて利益となっており、損失が発生しているものはない。

#### ⑤組織管理体制の完成と記帳の簡素化

これまで見てきたように、第3秘密帳簿には、各地の拠点や織物工業会社で稼得した利益の計上とその分配を中心に、持株会社に相当する本部組織において必要とされる一連の記帳が、帳簿前半部分の最初から秩序立って行われていた。しかし、時間の経過に従い拠点数が増大していく中で、記帳の簡素化も見られるようになっていった。

既に見たヴェネツィア・メディチ銀行の例では、本部組織の出資者三者以外に、拠点責任者への分配や金銭の引き出しについても記帳されていた。しかし、やがて拠点責任者等に分配される部分を控除した後の利益、すなわち、本部組織に帰属する利益額のみが計上され、分配も本部組織の出資者三者に対してのみ記帳されるように変化している。

当初、拠点責任者らへの報酬の具体的な支払いについてまで本部組織の秘密帳簿に記録し、本部組織では極めて詳細かつ厳格な拠点管理を志向していたことがわかる。しかし、拠点の数が増えるに従い、煩雑さが増大し、すべてを詳細に把握することが困難になったことは容易に想像することができる。こうした状況の一方で、多数の拠点を効率的・効果的に管理するための体制や報告制度が、二人の総支配人によって整えられ、そうした体制の完成によって、本部組織の秘密帳簿に記帳される内容は次第に簡素化することになったと考えられる。細かい事項にまで厳しい監視の目を向けて力で支配するよりも、拠点責任者を共同経営者と位置付けて、大幅な権限移譲を行うことが、組織全体の利益向上につながることが理解され、その結果、本部組織の秘密帳簿に記帳されるべきものは、最低限のものだけで十分であると認識されたと考えられる。

#### (4) 勘定の締切りと残高繰越し

既述の通り、1440年にロレンツォ・デ・メディチが死去したことに伴い、翌年 1441年3月24日付で拠点及び本部組織のすべての帳簿が締め切られることとなった。これまでの分析からわかるように、各拠点においては、毎年3月24日付で帳簿の締め切りを行い、決算書が作成されていたのに対して、フィレンツェの本部組織の秘密帳簿では、拠点から報告された利益の記帳や分配がその都度記帳されるだけで、諸勘定が定期的に締め切られることはなかった。しかし、ここで初めて締め切りの手続きが見られるのである。

秘密帳簿の締め切りに当たって、各拠点からは、毎年の利益額の他、拠点責任者の分配利益の 引き出し状況等の報告を受け、それらがすべて本部組織の秘密帳簿に転記された結果、拠点責任 者の名を付けた人名勘定の残高はゼロとなっている。そして、最終的に繰り越される貸借残高が 確定し、これらが帳簿の後半部分に繰り越された。繰り越された勘定残高の具体的な内容につい ては、資料5に示した通りである。

借方残高は、いずれも拠点あるいは織物工業会社に対する投資残高であり、一方の貸方残高は、本部組織の出資者三者の持分勘定残高と、この時点までに清算が終わらなかった毛織物会社の責任者であったジュンティーノ・ジュンティーニの遺族の持分残高である。貸借合計額は完全に一致しており、これまでの記帳が複式簿記の原理に基づいて正確に行われていたことがわかる。

拠点への投資残高を示す借方は、本部組織からの出資により拠点の資本とされた金額と未分配の留保利益として計上されている部分の合計である。ジュネーヴ・メディチ銀行やヴェネツィア・メディチ銀行については、既に見たように、資本金として投資された額と留保利益となっている額が異なる勘定で別々に計上されているが、他の拠点や織物工業会社については、この区別がなく一つの勘定で計上されている。

また、貸方の本部組織の出資者三者の出資額については、既に見た通り、当初、メディチ家が f.24,000、ジョヴァンニ・ベンチとアントニオ・サルターティがそれぞれ f.4,000 であったが、1439 年5月16日付で、分配された利益の一部を出資額に正式に組み入れた結果、メディチ家がf.32,000、総支配人の二人がそれぞれ f.6,000 となっており、これがそのまま繰り越されている。また、分配されたものの引き出されもせず、出資額にも組み入れずに留め置かれている額については、追加出資金(sopraccorpo)として別勘定に計上されて繰り越されている。

以上のように、これら残高のある借方 13 項目、貸方 7 項目は、そのまま後半部分に、原則として同名の勘定が設定され、繰越しが行われている。

こうして、残高の繰り越し手続きが正しく行われていることが確認されるが、帳簿締め切りが行われた1441年11月1日現在の勘定残高一覧表や1435年に記帳が始められた時からこの締め切り時点までに計上された損益勘定を集計して本部組織における業績結果を示す計算表等は、この秘密帳簿内に見当たらず、実際作成されなかったと見られる。あくまでも、ロレンツォの死去に伴う組織の再結成に対応して、帳簿を締め切り、諸勘定の残高を確定させた上で繰り越しが行われたのみであった。

資料5 1441年11月1日現在の勘定残高

ジュネーヴ・メディチ銀行 Giovanni d'Amerigho Benci e conpagni di Ginevra ヴェネツィア・メディチ銀行 Chosimo e Lorenzo de' Medici e conpagni, nostri di Vinegia ブルージュ・アコマング投資 Bernardo di Giovanni d'Adoardo Portinari 毛織物工業会社 (1) Giovanni di Cosimo de' Medici e conpagni lanaiuoli 編織物工業会社 (1) Pierofrancescho di Lorenzo de' Medici e conpagni setaiuoli 毛織物工業会社 (1) Pierofrancescho di Lorenzo de' Medici e conpagni lanaiuoli Pierofrancescho di Lorenzo de' Medici e conpagni lanaiuoli アンコーナ・アコマング投資 Bernardo d'Andrea de' Medici per ragione dell'acomanda in Anchona フィレンツェ・メディチ銀行 I nostri di Firenze フィレンツェ・メディチ銀行 I nostri di Firenze フィレンツェ・メディチ銀行 I nostri di Ginevra ローマ・メディチ銀行 I nostri di Ginevra ローマ・メディチ銀行 I nostri di Ginevra ローマ・メディチ銀行 I nostri di Vinegia 網織物工業会社 Due terzi dell'entratura della bottegha della seta  佐方合計  佐方合計  f. s.  《貸方務高》  ボーク・ディナチリルターティ(出資金) Chosimo e Lorenzo de' Medici ジョヴァンニ・ベンチ (出資金) Antonio di messer Francescho Salutati ジュンティー・バ・ジュンティーー 相続人 Eredi di Giuntino di Ghuido Giuntini コジモをロレンツオ・デ・メディチ (追加出資金) Antonio di messer Francescho Salutati ジュンティー・バ・ジュンティーー 相続人 Eredi di Giuntino di Ghuido Giuntini コジモをロレンツオ・デ・メディチ (追加出資金) Antonio di messer Francescho Salutati ジョヴァンニ・ベンチ (追加出資金) Antonio di messer Francescho Salutati ジョヴァンニ・ベンチ (追加出資金) Antonio di messer Francescho Salutati ジョヴァンニ・ベンチ (追加出資金) Antonio di messer Francescho Salutati フジーナー・・デ・ナディーゲ (追加出資金) Antonio di messer Francescho Salutati アントニ・オ・サルターティ (追加出資金) Giovanni d'Amerigho Benci	f.	s.	d.
Giovanni d'Amerigho Benei e conpagni di Ginevra ヴェネツィア・メディチ銀行 Chosimo e Lorenzo de' Medici e conpagni, nostri di Vinegia フルージュ・アコマング投資 Bernardo di Giovanni d'Adoardo Portinari c. 30 6,420	c. 14 10.00		
Chosimo e Lorenzo de' Medici e conpagni, nostri di Vinegia  ブルージュ・アコマング投資 Bernardo di Giovanni d'Adoardo Portinari  毛織物工業会社(I) Giovanni di Cosimo de' Medici e conpagni lanaiuoli  絹織物工業会社(II) Pierofrancescho di Lorenzo de' Medici e conpagni setaiuoli  毛織物工業会社(II) Pierofrancescho di Lorenzo de' Medici e conpagni lanaiuoli  アコーナ・アコマング投資 Bernado d'Andrea de' Medici per ragione dell'acomanda in Anchona  フレンツェ・メディチ銀行 I nostri di Firenze フレンツェ・メディチ銀行 I nostri di Ginevra ローマ・メディチ銀行 I nostri di Ginevra ローマ・メディチ銀行 I nostri di Ginevra ローマ・メディチ銀行 I nostri di Vinegia 絹織物工業会社 Due terzi dell'entratura della bottegha della seta  佐女方 残高>  「た、44 4,960  信方合計  イ3960  信方合計  イ3960  信方合計  た、44 4,960  「た、45 6,587  「おっます di Vinegia 絹織物工業会社 Due terzi dell'entratura della bottegha della seta  佐方合計  イ3960  「た、46 235 10  佐方合計  イ3960  「た、47 19,566 9  「た、5. 26 方 残高  「た、47 19,562 9  Chosimo e Lorenzo de' Medici ジョヴァンニ・ベンティ(追加出資金) Chosimo e Lorenzo de' Medici ジョヴァンニ・ベンティ(追加出資金) Antonio di messer Prancescho Salutati アントーオ・サルターティ(追加出資金)	e conpagni di Ginevra		
プルージュ・アコマング 投資 Bernardo di Giovanni d'Adoardo Portinari 毛織物工業会社 (1) Giovanni di Cosimo de' Medici e conpagni lanaiuoli 組織物工業会社 (1) Pierofrancescho di Lorenzo de' Medici e conpagni setaiuoli 毛織物工業会社 (1) Pierofrancescho di Lorenzo de' Medici e conpagni setaiuoli モ織物工業会社 (1) Pierofrancescho di Lorenzo de' Medici e conpagni lanaiuoli アンコーナ・アコマング 投資 Bernado d'Andrea de' Medici per ragione dell'acomanda in Anchona フイレンツェ・メディチ銀行 I nostri di Pirenze ジュネーヴ・メディチ銀行 I nostri di Firenze ジュネーヴ・メディチ銀行 I nostri di Ginevra ローマ・メディチ銀行 I nostri de seghuitano la corte ヴェネツイア・メディチ銀行 I nostri de Senevra ローマ・メディチ銀行 I nostri di Vinegia 組織物工業会社 Due terzi dell'entratura della bottegha della seta  佐方合計  佐方合計  イス9.56 15  本質方 残高>  ボールン・メディチ(出資金) Giovanni d'Amerigho Benci アントニオ・サルターティ (出資金) Antonio di messer Francescho Salutati ジュンティー・バンティーニ相続人 Eredi di Giuntino di Ghuido Giuntini コジモ&ロレンツォ・デ・メディチ (出資金) Chosimo e Lorenzo de' Medici ジョヴァンニ・ベンチ (出資金) Antonio di messer Francescho Salutati ジュンティー・グ・ジュンティーニ相続人 Eredi di Giuntino di Ghuido Giuntini コジモ&ロレンツォ・デ・メディチ (追加出資金) Chosimo e Lorenzo de' Medici ジョヴァンニ・ベンチ (追加出資金) Antonio di messer Prancescho Salutati アントニオ・サルターティ (追加出資金) Antonio di messer Prancescho Salutati アントニオ・サルターティ (追加出資金) Antonio di messer Prancescho Salutati アントニオ・サルターティ (追加出資金)	c. 14 7,56		
Bernardo di Giovanni d'Adoardo Portinari	er e conpagni, nostri di vinegia		
毛織物工業会社(I) Giovanni di Cosimo de' Medici e conpagni lanaiuoli 絹織物工業会社 Pierrofrancescho di Lorenzo de' Medici e conpagni setaiuoli 毛織物工業会社(II) Pierofrancescho di Lorenzo de' Medici e conpagni setaiuoli モ織物工業会社(II) Pierofrancescho di Lorenzo de' Medici e conpagni lanaiuoli アンコーナ・アコマンダ投資 Bernado d'Andrea de' Medici per ragione dell'acomanda in Anchona フイレンツェ・メディチ銀行 I nostri di Firenze フイレンツェ・メディチ銀行 I nostri di Firenze フイレンツェ・メディチ銀行 I nostri di Ginevra ローマ・メディチ銀行 I nostri di Ginevra ローマ・メディチ銀行 I nostri di Vinegia 絹織物工業会社 Due terzi dell'entratura della bottegha della seta 借方合計  「た、44 4,960 日本ツィア・メディチ銀行 I nostri del Vinegia 絹織物工業会社 C、46 235 10  《貸方 残 高》 「た s. コジモ&ロレンツォ・デ・メディチ(出資金) Chosimo e Lorenzo de' Medici ジョヴァンニ・ベンチ(出資金) Antonio di messer Francescho Salutati ジュンティーノ・ジュンティーニ相続人 Eredi di Giuntino di Ghuido Giuntini コジモ&ロレンツオ・デ・メディチ(追加出資金) Chosimo e Lorenzo de' Medici ジョヴァンニ・ベンチ(追加出資金) Chosimo e Lorenzo de' Medici ジョヴァンニ・ベンチ(追加出資金) Chosimo e Lorenzo de' Medici ジョヴァンニ・ベンチ(非別な Giuntini) コジモ&ロレンツオ・デ・メディチ(自加出資金) Chosimo e Lorenzo de' Medici ジョヴァンニ・ベンチ(追加出資金) Chosimo e Lorenzo de' Medici ジョヴァンニ・ベンチ(追加出資金) Chosimo e Lorenzo de' Medici ジョヴァンニ・デ・メディチ(自加出資金) Chosimo e Lorenzo de' Medici ジョヴァンニ・ベンチ(追加出資金) Chosimo e Lorenzo de' Medici	ardo Portinari c. 30 6,42		
Giovanni di Cosimo de' Medici e conpagni lanaiuoli  絹織物工業会社 Pierofrancescho di Lorenzo de' Medici e conpagni setaiuoli 毛織物工業会社(II) Pierofrancescho di Lorenzo de' Medici e conpagni setaiuoli 毛織物工業会社(II) Pierofrancescho di Lorenzo de' Medici e conpagni lanaiuoli アンコーナ・アコマング投資 Bernado d'Andrea de' Medici per ragione dell'acomanda in Anchona  フイレンツェ・メディチ銀行 I nostri di Firenze フイレンツェ・メディチ銀行 I nostri di Firenze ジュネーヴ・メディチ銀行 I nostri di Ginevra ローマ・メディチ銀行 I nostri di Ginevra ローマ・メディチ銀行 I nostri di di Vinegia 絹織物工業会社 Due terzi dell'entratura della bottegha della seta  佐方合計  佐方合計  (こ、44 4,960			
解練物工業会社 Pierofrancescho di Lorenzo de' Medici e conpagni setaiuoli	ici e conpagni lanaiuoli c. 38 4,23	21	1
Pierofrancescho di Lorenzo de Medici e conpagni setauoli	• •		
Pierofrancescho di Lorenzo de' Medici e conpagni lanaiuoli アンコーナ・アコマンが投資 Bernado d'Andrea de' Medici per ragione dell'acomanda in Anchona フィレンツェ・メディチ銀行 I nostri di Firenze フィレンツェ・メディチ銀行 I nostri di Firenze フィレンツェ・メディチ銀行 I nostri di Ginevra ローマ・メディチ銀行 I nostri di Ginevra ローマ・メディチ銀行 I nostri che seghuitano la corte ヴェネツイで・メディチ銀行 I nostri di Vinegia 組織物工業会社 Due terzi dell'entratura della bottegha della seta  【告方合計 日本ので、シティチの代徴会 Chosimo e Lorenzo de' Medici ジョヴァンニ・ベンチ (出資金) Antonio di messer Francescho Salutati アントニオ・サルターティ(追加出資金) Antonio di messer Francescho Salutati	de' Medici e conpagni setaiuoli		
Pierofrancescho di Lorenzo de' Medici e conpagni Ianaiuoli アンコーナ・アコマング 投資 Bernado d'Andrea de' Medici per ragione dell'acomanda in Anchona フイレンツェ・メディチ銀行 I nostri di Firenze フイレンツェ・メディチ銀行 I nostri di Firenze ジュネーヴ・メディチ銀行 I nostri di Ginevra ローマ・メディチ銀行 I nostri di Ginevra ローマ・メディチ銀行 I nostri che seghuitano la corte ヴェネツィア・メディチ銀行 I nostri di Vinegia 絹織物工業会社 Due terzi dell'entratura della bottegha della seta  佐方合計  (こ、44 4,960 4,9	a 28 2.49		
Bernado d'Andrea de' Medici per ragione dell'acomanda in Anchona フイレンツェ・メディチ銀行 I nostri di Firenze フイレンツェ・メディチ銀行 I nostri di Firenze ジュネーヴ・メディチ銀行 I nostri di Ginevra ローマ・メディチ銀行 I nostri di Ginevra ローマ・メディチ銀行 I nostri che seghuitano la corte ヴェネッイア・メディチ銀行 I nostri di Vinegia 絹織物工業会社 Due terzi dell'entratura della bottegha della seta  佐方合計  「た、44 4,960  佐方合計  「お、5,674 3  21  4,901 23  「た、44 4,901 23  「た、44 4,960  「た、45 6,587  「おいます di Vinegia 「おいます dell'entratura della bottegha della seta  「た、46 235 10  「おいます dell'entratura della bottegha della seta  「た、46 235 10  「おいます dell'entratura della bottegha della seta  「た、46 235 10  「おいます ものいっと が、カース・デ・メディチ(出資金) 「ないます サルターティ(出資金) 「ないます サルターティ(出資金) 「ないます サルターティ(出資金) 「ないます ものいます で、45 6,000  「オントーオ・サルターティ(追加出資金) 「ないます ものいます に、45 612 26  「おいます ものいます に、47 19,562 9  「おいます ものいます に、48 4,890 18  アントニオ・サルターティ(追加出資金) 「ないます ものいます に、48 4,890 18  アントニオ・サルターティ(追加出資金) 「ないます は、4800 18	de' Medici e conpagni lanaiuoli		
Bernado d'Andrea de' Medici per ragione dell'acomanda in Anchona フイレンツェ・メディチ銀行 I nostri di Firenze フイレンツェ・メディチ銀行 I nostri di Firenze ジュネーヴ・メディチ銀行 I nostri di Ginevra ローマ・メディチ銀行 I nostri di Ginevra ローマ・メディチ銀行 I nostri di Vinegia	c 39 6 60		
Thostri di Firenze	i per ragione dell'acomanda in Anchona		
フィレンツェ・メディチ銀行 I nostri di Firenze ジュネーヴ・メディチ銀行 I nostri di Ginevra ローマ・メディチ銀行 I nostri che seghuitano la corte ヴェネツィア・メディチ銀行 I nostri di Vinegia 絹織物工業会社 Due terzi dell'entratura della bottegha della seta  《賞方残高》  「たいます・サルターティ(追加出資金) Antonio di messer Francescho Salutati アントニオ・サルターティ(追加出資金) Antonio di messer Francescho Salutati	c. 40 5,67	3	
Inostri di Firenze	,		
ジュネーヴ・メディチ銀行 I nostri di Ginevra       c. 44       4,901       23         ローマ・メディチ銀行 I nostri di Vinegia       c. 44       4,960         《賞方残高》       c. 45       6,587         I nostri di Vinegia       c. 46       235       10         相線物工業会社 Due terzi dell'entratura della bottegha della seta       c. 46       235       10         (本費方残高》       f. s.       s.         コジモ&ロレンツオ・デ・メディチ(出資金) Chosimo e Lorenzo de' Medici       c. 12       32,000         ジョヴァンニ・ベンチ(出資金) Giovanni d'Amerigho Benci       c. 13       6,000         アントニオ・サルターティ(出資金) Antonio di messer Francescho Salutati       c. 45       612       26         ビョヴァンニ・ベンチ(追加出資金) Chosimo e Lorenzo de' Medici       c. 47       19,562       9         ジョヴァンニ・ベンチ(追加出資金) Antonio di messer Francescho Salutati       c. 48       4,890       18         アントニオ・サルターティ(追加出資金) Antonio di messer Francescho Salutati       c. 48       4,890       18	c. 41 6,03	21	6
I nostri di Ginevra ローマ・メディチ銀行 I nostri che seghuitano la corte ヴェネツィア・メディチ銀行 I nostri di Vinegia 組織物工業会社 Due terzi dell'entratura della bottegha della seta  《賞方残高》  「た、44 4,960			
ローマ・メディチ銀行 I nostri che seghuitano la corte ヴェネツィア・メディチ銀行 I nostri di Vinegia  絹織物工業会社 Due terzi dell'entratura della bottegha della seta	c. 44 4,90	23	
I nostri che seghuitano la corte ヴェネツィア・メディチ銀行 I nostri di Vinegia  絹織物工業会社 Due terzi dell'entratura della bottegha della seta			
ヴェネツィア・メディチ銀行 I nostri di Vinegia       c. 45       6,587         絹織物工業会社 Due terzi dell'entratura della bottegha della seta       c. 46       235       10         《賞 方 残 高》       f. s.         コジモ&ロレンツオ・デ・メディチ (出資金) Chosimo e Lorenzo de' Medici       c. 12       32,000         ジョヴァンニ・ベンチ (出資金) Giovanni d'Amerigho Benci       c. 13       6,000         アントニオ・サルターティ (出資金) Antonio di messer Francescho Salutati       c. 45       612       26         ジュンティーノ・ジュンティーニ相続人 Eredi di Giuntino di Ghuido Giuntini       c. 45       612       26         コジモ&ロレンツオ・デ・メディチ (追加出資金) Chosimo e Lorenzo de' Medici       c. 47       19,562       9         ジョヴァンニ・ベンチ (追加出資金) Antonio di messer Francescho Salutati       c. 48       4,890       18         アントニオ・サルターティ (追加出資金)       c. 49       4,890       18	orte c. 44 4,96		
Thostri di Vinegia   編織物工業会社   C. 46   235   10   15			
Due terzi dell'entratura della bottegha della seta  (こ.46 235 10 73,956 15	c. 45 6,58		
### Due terzi dell'entratura della bottegha della seta  (情方合計 73,956 15 73,956 15	0.46 93	10	5
《賞方残高》 f. s.  コジモ&ロレンツォ・デ・メディチ(出資金) Chosimo e Lorenzo de' Medici ジョヴァンニ・ベンチ(出資金) Giovanni d'Amerigho Benci アントニオ・サルターティ(出資金) Antonio di messer Francescho Salutati ジュンティーノ・ジュンティーニ相続人 Eredi di Giuntino di Ghuido Giuntini コジモ&ロレンツォ・デ・メディチ(追加出資金) Chosimo e Lorenzo de' Medici ジョヴァンニ・ベンチ(追加出資金) Antonio di messer Francescho Salutati アントニオ・サルターティ(追加出資金) Antonio di messer Francescho Salutati	.a bottegha della seta	10	
コジモ&ロレンツォ・デ・メディチ (出資金)	借方合計 73,95	15	0
コジモ&ロレンツォ・デ・メディチ (出資金)			a
Chosimo e Lorenzo de' Medici ジョヴァンニ・ベンチ (出資金) Giovanni d'Amerigho Benci アントニオ・サルターティ (出資金) Antonio di messer Francescho Salutati ジュンティーノ・ジュンティーニ相続人 Eredi di Giuntino di Ghuido Giuntini コジモ&ロレンツォ・デ・メディチ (追加出資金) Chosimo e Lorenzo de' Medici ジョヴァンニ・ベンチ (追加出資金) Antonio di messer Francescho Salutati アントニオ・サルターティ (追加出資金)		s.	u.
ジョヴァンニ・ベンチ (出資金) Giovanni d'Amerigho Benci       c. 13       6,000         アントニオ・サルターティ (出資金) Antonio di messer Francescho Salutati       c. 13       6,000         ジュンティーノ・ジュンティーニ相続人 Eredi di Giuntino di Ghuido Giuntini       c. 45       612       26         コジモ&ロレンツォ・デ・メディチ (追加出資金) Chosimo e Lorenzo de' Medici       c. 47       19,562       9         ジョヴァンニ・ベンチ (追加出資金) Antonio di messer Francescho Salutati       c. 48       4,890       18         アントニオ・サルターティ (追加出資金)       c. 40       4,800       18			
Giovanni d'Amerigho Benci  アントニオ・サルターティ(出資金) Antonio di messer Francescho Salutati  ジュンティーノ・ジュンティーニ相続人 Eredi di Giuntino di Ghuido Giuntini コジモ&ロレンツォ・デ・メディチ(追加出資金) Chosimo e Lorenzo de' Medici ジョヴァンニ・ベンチ(追加出資金) Antonio di messer Francescho Salutati  アントニオ・サルターティ(追加出資金) 2.49 4,890 18			
アントニオ・サルターティ(出資金) Antonio di messer Francescho Salutati  ジュンティーノ・ジュンティーニ相続人 Eredi di Giuntino di Ghuido Giuntini コジモ&ロレンツォ・デ・メディチ(追加出資金) Chosimo e Lorenzo de' Medici  ジョヴァンニ・ベンチ(追加出資金) Antonio di messer Francescho Salutati アントニオ・サルターティ(追加出資金) 2.40 4890 18	c. 13 6,00		
Antonio di messer Francescho Salutati  ジュンティーノ・ジュンティーニ相続人 Eredi di Giuntino di Ghuido Giuntini コジモ&ロレンツォ・デ・メディチ(追加出資金) Chosimo e Lorenzo de' Medici ジョヴァンニ・ベンチ(追加出資金) Antonio di messer Francescho Salutati アントニオ・サルターティ(追加出資金)	÷)		
ジュンティーノ・ジュンティーニ相続人       c. 45       612       26         Eredi di Giuntino di Ghuido Giuntini       c. 45       612       26         コジモ&ロレンツォ・デ・メディチ (追加出資金) Chosimo e Lorenzo de' Medici       c. 47       19,562       9         ジョヴァンニ・ベンチ (追加出資金) Antonio di messer Francescho Salutati       c. 48       4,890       18         アントニオ・サルターティ (追加出資金)       c. 40       4,800       18	=' e 13 6 00		
Eredi di Giuntino di Ghuido Giuntini コジモ&ロレンツォ・デ・メディチ(追加出資金) Chosimo e Lorenzo de' Medici ジョヴァンニ・ベンチ(追加出資金) Antonio di messer Francescho Salutati アントニオ・サルターティ(追加出資金)	a 続人		
コジモ&ロレンツォ・デ・メディチ (追加出資金) c. 47 19,562 9 Chosimo e Lorenzo de' Medici c. 47 19,562 9 ジョヴァンニ・ベンチ (追加出資金) c. 48 4,890 18 アントニオ・サルターティ (追加出資金) c. 48 4,890 18	c 45 61	26	4
Chosimo e Lorenzo de' Medici c. 47 19,562 9 ジョヴァンニ・ベンチ (追加出資金) c. 48 4,890 18 アントニオ・サルターティ (追加出資金) a. 40 4,890 18	(追加出資金)		
Antonio di messer Francescho Salutati c. 48 4,890 18 アントニオ・サルターティ(追加出資金) a. 40 4,890 18		9	10
Antonio di messer Francescho Salutati アントニオ・サルターティ(追加出資金)	金)		_
		18	5
	·資金)	10	d. 1 6 5 0 d. 5 5 0
		18	1 1 1 3 6 3 6 3 6 4 6 10 3 5 5 3 5 5
貸方合計 73,956 15	(A+ ∧ ⇒) 50.0F	1.5	6 5 0 d. 4 10 5 5

[出所] ASF, MAP, Filza n. 153, doc. 3, cc. 11-14, 29-30, 37-41, 43-49 より作成。

# (5)後半部分に入ってからの記帳方法等の変化

秘密帳簿の後半部分に残高が繰り越されてからの記帳は、各拠点で稼得した利益の計上や分配を中心に、前半部分で見られたのと同じように行われた。しかし、基本的な記帳の流れに大きな変化は見られないものの、設定される勘定名や利益分配の記帳のタイミング等、一部において変化が認められる。

前半部分では、各拠点の利益を計上する際は、拠点ごとに設けられた二つの勘定を用いて記帳が行われていた。しかし、後半部分では、借方に計上される拠点勘定は前半部分と同様、拠点ごとにそれぞれ設けられたものの、貸方に計上される利益勘定は、各拠点に共通して使用される勘定が設けられ、ここに計上されることとなった。すなわち、「ヴェネツィア・メディチ銀行の利益」等に替わって、「フィレンツェ及びフィレンツェ以外の地の我々のコンパニーアで稼得した利益(Avanzi fatti alle nostre conpagnie di Firenze e di fuori)」(c. 63)等の名称が付けられた勘定が設けられ、ここに各拠点の利益を一括して計上するように変化しているのである。また、織物工業会社3社の利益についても、「毛織物・絹織物工房の我々のコンパニーアの利益(Avanzi delle conpagnie nostre delle botteghe di lana e della seta)」(c. 69)なる勘定が新たに設けられ、ここに共通して計上されるように変化している。

帳簿後半部分の記帳開始後の最初の数年間は、利益の計上方法が統一されておらず、勘定間の 修正計上が行われる等、混乱が一部見られたが、その後は、銀行業務を行う各地の拠点の利益と 織物工業会社三社の利益は、それぞれ前述の二つの勘定に計上される実務が定着している。

このように、拠点ごとにではなく、集約して利益が計上されるように変化したことは、利益分配のあり方にも影響を与えることとなった。各拠点や織物工業会社の結成期間は、必ずしも同一ではなく、それぞれの事情を考慮して決定されていたことから、分配のタイミングも異なっていたが、利益が拠点の別なくまとめて計上されるようになったことで、それぞれの結成期間満了を待たず、ほぼ毎年利益分配の記帳が行われるように変化している。1442年11月8日付で、フィレンツェ、ローマ、ヴェネツィア、ジュネーヴの各拠点の1441年度の利益総額を対象に、後半部分に入ってから初めての分配に関する記帳が行われたのを皮切りに、翌1443年8月3日付で、フィレンツェ、ローマ、ヴェネツィアの1442年度の利益が、1445年1月30日付でフィレンツェ、ヴェネツィア、ジュネーヴ、ピサの1443年度の利益及び織物工業会社3社の利益が分配されたことが記帳されている。

1443年に、本部組織の総支配人の一人であったアントニオ・サルターティが死去すると、この時は、メディチ家のロレンツォが死去した時のように、秘密帳簿の締め切り等は行われず、本部組織の結成契約書の規定の一部改定が行われたのみで、帳簿の記帳は継続されている。本部組織の出資者は、コジモ・デ・メディチとジョヴァンニ・ベンチの二者となり、利益分配比率は、前者が従来の3分の2から4分の3に、後者が6分の1から4分の1に変更された。その後の分配は、この新たに規定された比率によって行われている。

この時期になると、利益を計上する勘定は、「フィレンツェ外及びフィレンツェの我々のコン

パニーアの 1444 年と 1445 年の利益 (Avanzi delle nostre conpagnie di fuori e dell'anche di Firenze dell'anno 1444 e 1445)」(c. 80) のような名称が付されるようになり、拠点別ではなく、年度ごとに各拠点の利益を計上することが明確化されている。こうして、毎年、各拠点の利益が計上されて集計されると、直ちに分配されるようになっているのである。

このような記帳方法の変化の理由については、帳簿内に何の記述も見られない。しかし、後半部分が締め切られるまで、体系的な記帳は続けられ、最後まで複式簿記に基づいた記帳が行われたことは事実として認められる。

### (6) メディチ家の持分とその継承

前節で見た後半部分に入ってからの変化は、メディチ銀行の支配者であるメディチ家の持分勘 定の記帳のあり方の変化とも関係しているように思われる。

メディチ家の持分として、c. 12 の本部組織の出資額として計上された f. 32,000 と c. 47 の分配後も引き出されずにそのまま留め置かれ、追加出資金となっている f. 19,562 s. 9 d. 10 の二つの勘定残高は、それぞれ後半部分の c. 56 と c. 61 に繰り越された。そしてこの時、それまでコジモとロレンツォの二人の名前が付けられていたこれらの勘定名は、「コジモ・デ・メディチ」に変化しており、メディチ家の持分すべてがコジモー人のものとされた。

このように、メディチ家の持分勘定としては、二つの勘定残高が前半部分から後半部分へと繰り越された訳だが、これら二つの勘定はそれぞれ異なる役割を持ったものであった。すなわち、前者は本部組織結成のための出資金を計上するものであり、原則として、増減資が行われない限り、この勘定に記帳が行われることはなかった。一方、後者は、各拠点で稼得した利益の分配によって貸方に計上され、それを金銭として引き出すと借方に計上されるというように、経常的に記帳が繰り返される勘定であった。

後半部分に入ってからしばらくは、この原則に従い、追加出資金が繰り越された c. 61 の勘定に、その後に行われた利益分配や引き出しの記帳が行われていたが、後半部分の記帳が始まってから7期目の末、すなわち1448年3月24日付で、この時点におけるこの勘定の残高f.43,225 s.19 d.5 が、c. 56 の出資金を計上する勘定に振り替えられている。そして、その後の利益分配と引き出しの記帳は、この勘定において記帳されるようになっているのである。すなわち、二つの勘定は統合され、出資金、追加出資金の区別なく、一つの勘定でメディチ家の持分を計上するように変化しているのである。

前節で見たように、各拠点の利益は一括して計上されるとともに、毎年分配が行われるように変化しており、そのことによって、メディチ家の持分も頻繁に増減することとなった。そのため、メディチ家の持分勘定を統合することによって、持分総額の把握を容易にしようとしたと考えることができる。この点についても、一切の説明が見られないことから、詳細は不明であるが、これら後半部分に入ってから見られた記帳方法等の変化は、この第3秘密帳簿の記帳目的が大きく変化したことを示しているように思われる。すなわち、当初は、各地の拠点で行われていた会計

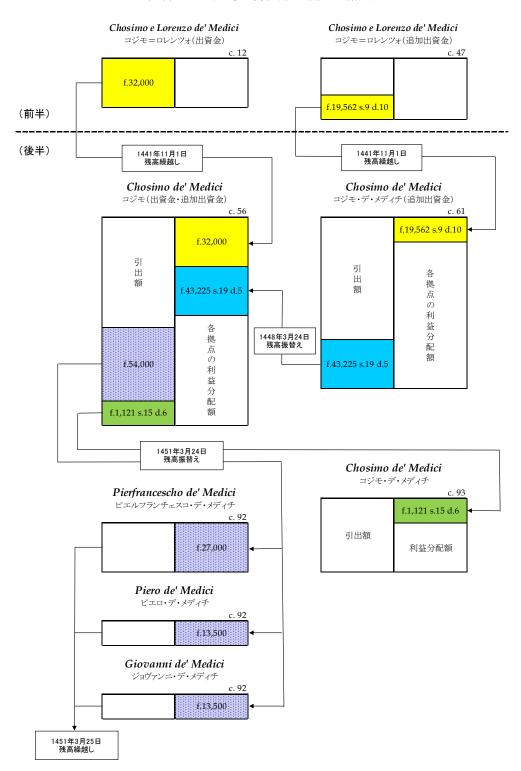
実務を総括し、組織全体の管理的側面に重点を置いていた実務が、メディチ銀行の支配者であるメディチ家の持分管理に重点がシフトしているように思われるのである。この時期、メディチ銀行は繁栄の絶頂にあり、各拠点とも莫大な利益を計上していた<sup>260</sup>。持株会社形態の組織体制が構築された当初のような厳格な拠点管理の必要性が薄れるとともに、メディチ家当主のコジモは、フィレンツェの政治的支配を進める中で、多くの資金を必要としていたことがその背景にあったと考えられる。

1451年に、コジモは、かつて父親のジョヴァンニがそうしたように、実質的には銀行業務に関与し続けながらも、メディチ銀行の持分を息子たちに譲り、表舞台から去ることとした。これに伴い、1451年3月24日付で第3秘密帳簿の後半部分が締め切られることとなった。締め切りに当たり、自らの名を付けたメディチ家の持分勘定残高のうちf.54,000を、亡くなった弟ロレンツォの息子ピエルフランチェスコ(Pierfrancesco de' Medici, 1430-1476)にf.27,000、自らの二人の息子ピエロ(Piero de' Medici, 1416-1469)とジョヴァンニ(Giovanni de' Medici, 1421-1463)にそれぞれ f.13,500 ずつ継承することとし、その振り替えの記帳が、同日付で行われた。また、残りの残高f.1,121 s.15 d.6 は、c. 93 に改めてコジモ名義の勘定を設けてここに振り替え、未処理であった拠点の利益分配が行われた後、全額が金銭として引き出され、最終的に残高はゼロとなっている。以上のメディチ家当主の持分勘定の第3秘密帳簿におけるこれまでの計上の流れを、資料6に示した。

他のすべての勘定についても締め切り手続きが行われ、繰り越される勘定残高が確定した。その詳細は資料7に示した通りである。前半部分が締め切られた際と同じように、借方には各拠点への投資残高が、貸方にはコジモから継承したメディチ家の三人の持分残高の他、総支配人のジョヴァンニ・ベンチの持分、そして亡くなったアントニオ・サルターティの持分(正確には、彼の遺族の持分)が計上されている。総支配人の二人の持分勘定も統合されており、前半部分が締め切られた際に比べて、シンプルな形となっている。貸借合計額は一致しており、複式簿記に基づいて正確な記帳が続けられていたことがわかるが、この時も、繰り越される勘定残高の一覧表や損益勘定を集計した計算書等は作成されなかったと見られる。

残高の繰り越しは、帳簿締め切りの翌日3月25日付で行われたと記録されているが、残高が繰り越され、第3秘密帳簿に続けて記録された帳簿は現存していない(あるいは、発見されていない)。

# 資料6 メディチ家の持分勘定(勘定連絡図)



# 資料7 1451年3月24日現在の勘定残高

≪借 方 残 高≫		f.	s.	d.
ジュネーヴ・メディチ銀行	c 96	11 807	6	10
La conpagnia che abiamo a Ginevra con Francescho Sassetti	C. 50	11,007	U	10
ヴェネツィア・メディチ銀行	c. 96	7.700		
La conpagnia che abiamo a Vinegia con Alessandro Martelli	0.00	.,		
アヴィニョン・メディチ銀行	c. 96	8.400		
La conpagnia che abiamo a Vignone con G. Zanpini e con V. Peruzzi		-,		
ブルージュ・アコマンダ投資	c. 96	10,800		
L'achomanda che abiamo fatta a Bruggia a Agnolo di Jacopo Tani		,		
ロンドン・アコマンダ投資	c. 96	4,800		
L'achomanda che abiamo fatta a Londra a Simone d'Antonio Nori 毛織物工業会社(I)				
七藏物工業云仁(1)  La conpagnia che abiamo fatta con Andrea Giuntini alla bottegha	0.07	2 500		
dell'arte della lana	C. 91	5,500		
毛織物工業会社(II)				
七麻物工業云社(II)  La conpagnia che abiamo fatta con Antonio di Tadeo di Filippo	c 97	2 500		
alla bottegha dell'arte della lana	c. <i>0</i> 1	2,000		
組織物工業会社				
La conpagnia che abiamo con Berlinghieri di Francescho e	c. 97	4.800		
Jacopo Tanagli alla bottegha dell'arte della seta		,		
絹織物工業会社	0.7	<b>5</b> 00 4	1.0	0
Piero di Chosimo de' Medici e conpagni e Tanagli	c. 97	7,824	16	2
フィレンツェ・メディチ銀行	0.07	19.059	1	10
I nostri di Firenze	C. 91	12,992	1	10
供方	>= <del>+</del>	75 083	24	10
16.77 L	1 11	c. 96       11,807         c. 96       7,700         c. 96       8,400         c. 96       10,800         c. 96       4,800         c. 97       3,500         c. 97       2,500         c. 97       4,800         c. 97       7,824         c. 97       12,952         75,083       2         c. 93       3,083         c. 92       27,000         c. 92       13,500         c. 92       18,000		10
≪貸 方 残 高≫		£		d.
		1,	s.	u.
アントニオ・サルターティ Antonio di messer Francescho Salutati	c. 93	3,083	24	10
ピエルフランチェスコ・デ・メディチ Pierofrancescho di Lorenzo di Giovanni de' Medici	c. 92	27,000		
ピエロ・デ・メディチ Piero di Chosimo di Giovanni de' Medici	c. 92	13,500		
		•		
ジョヴァンニ・デ・メディチ	c. 92	13,500		
Giovanni di Chosimo di Giovanni de' Medici		•		
ジョヴァンニ・ベンチ Giovanni d'Amerigho di Simone Benci	c. 96 7,700 Peruzzi c. 96 8,400 O Tani c. 96 10,800 O Nori c. 96 4,800  tegha c. 97 3,500  c. 97 4,800 c. 97 7,824 16 c. 97 12,952 1  75,083 24 c. 92 27,000 c. 92 13,500 c. 92 13,500 c. 92 18,000			
Giovanni d'Amerigno di Simone Benci	-			
			24 1 s. c	

[出所] ASF, MAP, Filza n. 153, doc. 3, cc. 91-93, 95-97 より作成。

# 5. まとめ

本稿では、持株会社形態の組織として完成されたメディチ銀行の本部組織において行われた会計実務の詳細を、この時期に記録された第3秘密帳簿に記録された内容から分析してきた。

分析から明らかになった本部組織で行われた会計実務の具体的な内容や特徴をまとめると、以下の通りである。

- ○複式簿記の原理に基づいた正しい記帳が行われており、その結果、貸借計上額の合計は一致 している
- ○元帳に相当するもののみが設定され、これに取引が直接記帳されている。日記帳や仕訳帳等 の他の帳簿は用いられていなかった
- ○勘定の記帳方式は、左右見開きのフォーリオに貸借を対照させる方式(左右対照形式、ヴェネツィア方式)が採用され、これは当時のフィレンツェにおいて一般的なものであった
- ○本部組織の出資者の持分勘定、拠点への投資勘定、拠点の利益を計上する勘定等の限定された勘定のみが設定されていた
- ○現金勘定は設定されておらず、実際、本部組織は現金を持っていなかった(フィレンツェ・メディチ銀行が、本部組織の金庫の役割を果たした)
- ○同様に、費用勘定も設定されていなかった
- ○記帳内容は、メディチ家と総支配人よる本部組織結成のための出資、拠点設立のための資本 投下、各拠点の年度ごとの利益の計上、換算によって生じた差益の計上、これら利益の分配、 そして出資者による分配利益の引き出しを中心に構成されていた
- ○各拠点の年度ごとの利益の計上方法は、今日の連結財務諸表作成に当たって、非連結子会社 や関連会社への投資に対して適用が要請される「持分法」による処理とまったく同じもので あった
- ○拠点間の複雑な貸借関係(債権債務関係)についてまで、細かい記帳が行われた(やがて省略されるように変化)
- ○各拠点に対しては、毎年3月24日付で帳簿の締め切りが行われたのに対して、本部組織の 秘密帳簿は、必要な事態が生じた場合のみ、締め切りが行われた
- ○帳簿締め切り後、諸勘定の残高を繰り越す手続きは正確に行われた
- ○帳簿締め切りに際して、各拠点に対しては、毎年、貸借対照表や損益計算書等に相当する決算書の作成が要請されたが、本部組織の秘密帳簿内に決算書が作成された形跡は見当たらない

このように、当時の一般のコンパニーアで見られた実務に比べると、極めて特徴的な会計実務ではあったが、それは、本部組織が具体的な事業を行わず、実質的な実体をもたない組織であったことに強く関係している。しかし、ここで見られた実務は、各地の拠点や工業会社で行われていた実務も含め、組織全体の会計実務を総括する体系的なものであったと評価することができる。

このような会計実務が形成され、実践された動機は、まず何よりも、組織全体の的確で合理的な経営管理を実現することにあった。特に、1435年にコジモ・デ・メディチが行った組織再編で、持株会社形態の組織への改編が行われた当初は、各拠点からの報告に基づいて、毎期の利益額のみならず、拠点責任者の金銭の引き出し等についてまで極めて詳細な事項が記帳されており、厳密な管理を志向して、この第3秘密帳簿の記帳が始められたことがわかる。また、利益の分配は、拠点設立に際して締結されたコンパニーア結成契約書に規定された分配比率に従って、正確に行われたことが記帳されており、そこにメディチ家の経営実践における合理的な姿勢を見ることができる。

帳簿の締め切りが定期的に行われなかった理由については、設定された勘定数や記帳項目数が膨大なものではなかったことから、記帳記録から大体のことが把握できたためであると考えられる。また、そうしたことが可能になるように勘定が設けられ、記帳が行われていたと言うことも可能であろう。その結果、管理目的で決算書をわざわざ作成する必要がなかったのである。また、秘密帳簿の記帳自体は共同経営者の総支配人によって行われ、真の支配者であるメディチ家の当主らもメディチ銀行の事業に密接に関与していたことから、報告目的で決算書が作成される必要もなかったと思われる。

こうして始められた実践が積み重ねられる中で、拠点の管理体制が整備され、一連の記帳が継 続的に行われるようになり、一部記帳の簡素化も見られた。

帳簿の後半部分に移ってからも、正確な記帳が継続して実践されていることに変わりはなかったが、拠点利益の計上方法、利益分配のあり方等に変化が見られた。こうした変化からは、秘密帳簿記帳の主眼が、メディチ銀行の支配者であるメディチ家の持分の管理にシフトしたことが窺える。しかし、組織の支配者が自らの持分を正確に把握しようとすること自体は当然のことと言え、秘密帳簿における体系化された精密で正確な記帳を通じて、組織全体の経営管理が安定して行えるようになって初めて、本来の目的が明確に意識されて記帳が行われるようになったと考えることもできよう。経営管理の側面が忘れ去られた訳ではなく、これが的確に行われている前提で、支配者の持分の正確な把握と管理が可能となったのである。

以上のように、メディチ銀行では、各地の拠点においてと同様、本部組織においても、複式簿記に基づき、組織全体を総括する体系的な会計実務が行われていた。ここでは、複式簿記が、効率的・合理的な管理、統制を行うため、正確な利益分配を実現するため、そして、出資者であり支配者であるメディチ家の持分を正しく把握し管理するため等、多様な目的を実現するために用いられていた。

### 注

- (1) *Cf.* De Roover [1963]
- (2) ここで言う複式簿記は、単に取引が貸借二面的に記録されるだけでなく、物財、人名勘定に加えて、収益、費用、資本の名目勘定も含めた完全な勘定体系が存在し、その記録の集計から、財政状態と経営成績を示す計算書のいずれもが連携をもって作成され得る記帳体系を指している。
- (3) De Roover [1963] p. 81.
- (4) メディチ銀行の拠点設立に際して締結されたコンパニーア結成契約書の詳細については、橋本 [2013] を参照されたい。
- (5) 3月24日は、キリスト教の「受胎告知の日」で、フィレンツェではその翌日をもって新年号へ更 改することとされていた(高山・池上 [2005] 84頁)。そのため、メディチ銀行でも、この日をもっ て決算を行っていたと考えられる。
- (6) 現存する数少ないメディチ銀行の拠点で作成された決算報告書類の中でも、計算書、明細書等の一式が完全に揃った唯一のものとされるミラノ・メディチ銀行の報告書類 (1460年) については、橋本 [2009] 297-306 頁において詳細な分析を行っているので、参照されたい。
- (7) De Roover [1963] pp. 84f, 100.
- (8) 会計帳簿に、色と記号 (アルファベット) を組み合わせた名称をつけて管理することは、14世紀 のダティーニ商会等でも見られ、当時のコンパニーアにおいては一般的なものであったと考えられる。
- (9) De Roover [1949] p. 237.
- (10) ビランチオとは、資産、負債、資本の各勘定残高から作成した財産一覧を記載した計算書で、この ビランチオの作成を通じ、財産法によって損益を算出する実務が、トスカーナ地方のコンパニーアで、 複式簿記が完成される以前から行われてきた。「残高表 (saldo)」「勘定残高計算書 (saldamento della ragione)」等とも呼ばれた。
- (11) De Roover [1963] p. 46.
- (12) 当初、ジェンティーレ・ブオーニ (Gentile di Bardassare Buoni) も出資に加わったが、数か月後に脱退した。一方、ベネデット・デ・バルディは、共同経営者の立場から、1402年に新たに設けられた総支配人のポストに移ったと見られる。
- (13) ベネデット・デ・バルディが 1420 年に死去したのに伴い、1400 年からローマ・メディチ銀行の拠点責任者を務めていた弟のイラリオーネが総支配人ポストを継ぐことになった。*Cf.* De Roover [1963] pp. 48f.
- (14) De Roover [1949] p. 238.
- (15) こうした記帳形式について、第3秘密帳簿の表紙部分には、「これ [=本帳簿] は、ヴェネツィア 式にて記帳する。すなわち、一方の面に借方を、他方の面に貸方を。 (... e tegniallo alla viniziana, nell'una faccia il dare e nell'altra l'avere)」と説明されている。 *Cf.* ASF, MAP, Filza n. 153, doc. 3, c. 1r.

- (16) 中世ヨーロッパの貨幣単位には、カロリング朝の貨幣改革 (755 年頃) 以降、長らく小額貨幣であるデナリウス銀貨に基盤を置き、1リブラ (リラ) =20 ソリドゥス (ソルド) =240 デナリウス (デナーロ) という進法が採用されてきた。その後、貿易の拡大に伴い、額面の大きい貨幣が必要とされ、グロッソ銀貨やフィオリーノ金貨等が発行された。当初、フィオリーノ金貨は1リブラ (リラ) と同価値のものとして発行されたが、金に対する銀の交換レートが下落したことにより、フィオリーノ金貨に基盤を置いた新しい進法が制定されることとなった (1271 年)。Cf. Evans [1931] p. 488; Lopez & Raymond [1955] pp. 12ff.
- (17) 「ア・フィオリーノ (a fiorino)」は、フィオリーノ金貨に基盤を置いた計算貨幣であることを示す。第3秘密帳簿においては、「aff.」と表記されている。
- (18) ローマ教皇庁を顧客として銀行業務を行うメディチ銀行の組織を、「ローマ・メディチ銀行」と呼んでいるが、実際には、教皇が各地に移動するのに合わせて業務を行っており、ここで記録された利益は、教皇が主としてボローニャに滞在していた期間にそこで行われた業務から得られたものである。 Cf. De Roover [1963] p. 194.
- (19) 実際には、本文で示したような複合仕訳で記帳された訳ではなく、下記の6つの単純仕訳で記帳されている。

[借]	ジュネーヴ・メディチ銀行	f. 3,000	[貸] メディチ家	f. 3,000
[借]	ヴェネツィア・メディチ銀行	f.3,560	[貸] メディチ家	f.3,560
[借]	ジュネーヴ・メディチ銀行	f.1,000	[貸] メディチ家	f.1,000
[借]	ヴェネツィア・メディチ銀行	f.16,440	[貸] メディチ家	f.16,440
[借]	ジュネーヴ・メディチ銀行	f.4,000	[貸] ジョヴァンニ・ベンチ	f.4,000
[借]	ヴェネツィア・メディチ銀行	f.4,000	[貸] アントニオ・サルターティ	f.4,000

- (20) ヴェネツィア・メディチ銀行は、1402年に設立された。また、ジュネーヴ・メディチ銀行は、その 前身となる組織が 1424年に設立された。
- (21) ASF, MAP, Filza n. 153, doc. 3, c. 3r.
- (22) *Loc.cit.*
- (23) ASF, MAP, Filza n. 153, doc. 3, c. 2r.
- (24) ジョヴァンニ・ベンチとアントニオ・サルターティは、同額(同比率)の利益を得ることと規定されていたが、ここでの分配記帳においてはd.1の差異が生じている。端数処理のため生じたものであるが、他の拠点の利益分配においてこの差額は調整されており、最終的な二人の分配額には、一切差異がない結果となっている。
- (25) Cf. De Roover [1944] pp. 390f.
- (26) De Roover [1963] p. 85.

#### 一次資料

Archivio di Stato di Firenze (ASF), Mediceo avanti il Principato (MAP), Filza n. 153,

doc. 1, cc. 1-129 (メディチ銀行本部の第1秘密帳簿)

doc. 2, cc. 2-87 (同第2秘密帳簿)

doc. 3, cc. 1-100 (同第3秘密帳簿)

### 参考文献

- De Roover, Raymond [1944] "Early Accounting Problems of Foreign Exchange," *The Accounting Review*, Vol. 19, No. 4.
- [1949] "I libri segreti del Banco de' Medici," Archivio Storico Italiano, Anno CVII.
- [1963] *The Rise and Decline of the Medici Bank, 1397-1494*, Cambridge, Harvard University Press.
- Evans, Allan [1931] "Some Coinage Systems of the Fourteenth Century," *Journal of Economic and Business History*, Vol. 3, No. 3.
- Fazzini, Marco & Fici, Luigi [2001] "Il Banco de' Medici: evoluzione di una holding bancaria attraverso le fonti documentali," *Rivista italiana di ragioneria e di economia aziendale*, Volume 101, fasciolo 11/12.
- Lopez, Robert S. & Raymond, Irving [1955] *Medieval Trade in the Mediterranean World:*\*Illustrative Documents Translated with Introductions and Notes, New York, Columbia University Press.

高山 博・池上俊一編 [2005] 『西洋中世学入門』 東京大学出版会。

橋本寿哉 [2009] 『中世イタリア複式簿記生成史』 白桃書房。

------ [2013] 「メディチ銀行の経営組織と拠点管理」『経済研究』 大東文化大学経済研究所、第 26 号。

藤澤道郎 [2001] 『メディチ家はなぜ栄えたか』 講談社選書メチエ。

森田義之 [1999] 『メディチ家』講談社現代新書。